

考えてよさそうである。他は胎土と焼成が硬質で他の産地可能性もある。鉄絵を施した丸碗(633)と半筒形碗(785)は18世紀前半、小杉碗(634)、無文の丸碗(786)、油受台(635)、灯明皿(823)は18世紀後半～19世紀とみられる。

18世紀後葉～19世紀の広義の京焼系では、上部包含層から鍋(521)、上層石垣裏込から白土イッチン描き行平類片(566)が出土したほか、灰釉主体で、白土イッチン・呉須絵・鉄絵などを併用する明治期の蓋付鉢・鍋・土瓶・行平類・碗・皿(787～794)が内堀上部埋土から大量に出土した。

18世紀代を中心とする京焼～京焼系の碗ほか小物類は、岡山城や周辺の遺跡で一定量が出土するが、彩色を施した丸碗はそう多くなく、鉄絵もしくは無文の小杉碗・半筒形碗、それに無文の灯明具が主体である。また、18世紀後葉～明治の緑灰色の灰釉主体の京焼系は土瓶・行平類(566・721・793・794)を中心に多数が出土しているが、実際には複数産地の製品が混ざっているとみられる。確かに関西産の可能性を持つものもあるが、岡山近郊でも虫明(邑久町)や宇野津(倉敷市)など各地で灰釉陶器を焼いていたし、中国地方の他地域や四国産の可能性をもつものもある。

なお、岡山城本丸下の段の17世紀前葉の井戸(S E 3)からは、初期京焼(軟質陶器・白土+緑文ほか・胎土は赤褐)の碗が1点出土している。

g. 丹波焼・堺・明石

丹波焼は、16世紀末から17世紀初のスリメ1本引きの播鉢が2点(548・844)と浅鉢が1点(549)、包含層や堀から出土した。この時期の丹波焼は岡山城内外でも散見できるが、備前焼産地を抱えた地域だけに稀である。また、18世紀後葉以降の丹波焼甕(737)が内堀下部埋土から出土したほか、明治期の鉄釉にイッチン描きの丹波産徳利が内堀上部から出土した。

堺・明石産とみられる無釉焼締の陶器は、内堀上部埋土を中心に播鉢(550・885～896)が33点、植木鉢～鉢(897・898)が3点出土した。播鉢は中形品のほか小形品もある。見込のスリメ文様、口縁形態、胎土・焼成の特徴⁹⁾などから18世紀後葉までの堺産とみられるもの(825・826)もあるが、主体は19世紀の明石産とみられる。江戸後半期の堺・明石産播鉢は岡山城やその周辺の遺跡でも多数が出土しているが、やはり明石産とみられる18世紀末以降の製品が圧倒する。

h. 備前焼

16世紀末～17世紀前葉では、大皿(盤)・播鉢・鉢・徳利・壺・大甕などがある。下層遺構では68点の備前焼が出土した。大皿(99・149・150・196)が9点もあり、口端が鉤形に折れるものが卓越している。このタイプの口端は、三角に上折れするものから次第に内折れ度を強めて巻くものに変化していくとみられ、下層遺構で出土した一群は16世紀末～17世紀初頭の特徴を示している。盤としての用途が考えられる浅鉢(151・152)は茶入形の水注(281)などとともに上手物として注目してよい。壺(156・254)は大小様々な形態のものがあるが、徳利(191・281)は頸部が長い鶴首である。播鉢(154・155・190・209・210・255～257・280)は数多く、天正頃から元和頃までの製品を含んでいる。S K 34の大甕(100・101)は、文禄年間と16世紀中葉の製品である。この期の製品は播鉢を中心に包含層や内堀からも出土したが、特に注目されるのは、茶陶ないしは接客用品と考える特殊な鉢・水注類(531～533・720・724・725・833)の存在である。うちでも三脚鉢(531)は優品で底面のボタ餅と黄ゴマが美しく、「叶」のヘラ書きがある。16世紀末～17世紀前葉の備前焼は、岡山城本丸や二の丸でも多数出土し、播鉢・徳利が卓越するなかで、上等の大皿(盤)が目立ち、茶入様の小壺なども散見できる。1640年下限の二日市銭座跡でも備前焼が多数出土したが、例えば徳利は器形が多様化し紫黒色の塗土(伊部手)を施したも

のが含まれるなど、本発掘による下層遺構出土品に後出する一群をなしている。

17世紀中葉以降の備前焼も多数出土したが、やはり播鉢が多い。その変遷は、本章第3節に示した通りである。江戸中後期の備前焼播鉢は、堺・明石産を主体とする関西系播鉢などと各消費地で競合しているが、17世紀末(近世3期)以降の製品に限った本発掘出土播鉢の内訳は、備前が27点に対し堺・明石が33点でその他はなく、備前のシェアは45%に留まって関西系に敗れている。しかも備前は相対的に古いものが多く、19世紀中葉での備前焼のシェアは確実に10%以下に落ちている。これが備前焼産地を領内にもつ岡山藩の御用商人達が住む町の実状である。二の丸武家地や周辺遺跡でも関西系が多いのは同じであるが、岡山城本丸・新道遺跡(城下町の南端付近の下級武家地)・南方釜田遺跡(城下北西端のゴミ穴)などでは概算で6:4から7:3で備前が勝り、面目を保っている。本発掘地より備前が強いのは、18世紀後半～19世紀前葉の状況を直接的に反映しているためであろう。

徳利は多様であるが17世紀末以降には尻切り形で体部に糸目(カキメ)を残すもの(732・854)があり、18世紀中葉に以降に凹ませた体部に型押文を貼付る人形徳利(852・853・857)、19世紀中葉に角徳利(856)が盛行し、それぞれ該当する製品が出土した。型押しによる成形や施文は18世紀以降にみられる技法で、先年行われた総合調査⁽¹⁰⁾で判明した最古の記念銘土型は元禄16年(1703)のものである。その調査では、備前焼の土型は予想以上に多彩であることが判明したが、人形徳利などへの貼付文用のほかでは、置物製作用が目立ち、本調査でも獅子(869～871)が2個体分出土した。また、出土した角徳利(856)や絵皿(828)も型押し製品である。一般の皿は底部糸切り後にヘラ削りを施す灯明皿で返りを持たないもの(527・818～820)と持つもの(528・529・821・822・824～827)がある。17世紀は返りを持たないものが主体で、以後は両者が併存する。たいてい塗土を施し、大まかには17世紀から19世紀にかけて発色が暗紫、茶褐、赤と変化するが、例外もかなりあり絶対視はできない。幕末・明治期の内堀上部の資料では、返りがかなり退化しているのが判る。こうした灯明皿は円筒形のサヤに入れて重焼され、関西系播鉢にシェアを奪われた後にも徳利類と並ぶ主力製品として他国にも流通した。サヤ形の鉢(534・772・773・834～836)もよく見かけるが、胎土が精良なものとサヤの流用品的な粗いものがある。明らかなサヤ(873)も1点出土した。甕類としての流用品とみられるが、新道遺跡でも透穴をもつ大形サヤが出土している。体部の上寄りにカキメをもつ小形甕(536・861～866)も多く、その蓋(867・868)もある。赤褐色の塗土(朱泥)は19世紀に盛行するが、類品は1640年下限の二日市銭座の組成にも含まれ、サヤ形の鉢などと並んで変化の捉えにくい器種である。内堀上部埋土の茶碗や土瓶類(874～883)は明治まで下る製品で、薄手で胎土が精良であるが焼締度が低く断面がザラつき、橙色～暗茶褐色を呈す。彩色を施した色備前や施釉陶器風の陶印をもつものを含み、地面に突き刺すタイプの花立(872)などと合わせて、幕末・明治の備前焼が衰退するなかで、多彩な器種に挑戦していった状況が窺える。スタンブ文土瓶と同様のものは、1896年に開校した岡山第一中学校に関わる本丸中の段のゴミ穴でも多数が出土した。

i. その他の陶器

江戸前半期にもその他の産地もしくは産地不明の陶器類が散見できたが、幕末・明治期は特に多彩である。先の京焼系でも触れた緑灰色の灰釉を主体とするものでは、白土イッチン描きと合わせて意匠的に飛びカンナ状ケズリを施すものもある。他にはカキ釉(795)のもの、鉄釉(520)のもの、体部にクシ条線を施した後に暗褐緑色の飴釉を掛けたもの、白土地の上に鉄絵や緑釉文を施したものも、本調査地を含む城下や周辺部で多見できる。これらは、圧倒的に土瓶・行平類で、先の備前焼土瓶と合わ

せて、この手の器種の増大(喫茶の普及や調理法の変革)が幕末・明治期にあったことが窺える。カキ釉製品には火鉢などもある。内堀上部埋土には徳利も数多く、江戸後期はそれほどでもないのに、明治に入って爆発的に盛行したことが判る。鉄釉地に白土イッチンもしくはヘラ彫で字を書いたもの(899~903)が多く、貧乏(通い)徳利であったことが判る。暗紫褐色の胎土に光沢のある鉄釉を掛け底部を回転ケズリする⁽¹¹⁾四国徳島の大谷焼系のものが多そうであるが、厳密な意味で大谷製とするには疑問点が残り、他産地産の可能性もある。少量であるが、丹波産や軟質でその他の産地と判断できるものも含む。明治の大谷系では甕・鉢(905~907)も入っている。

j. その他の磁器

内堀上部の出土品は酸化コバルトを型紙刷(803・807~809)や銅版転写(805・810)した製品を大量に含み、1907年下限の良好な一括資料であることを再認識させてくれる。酸化コバルトは1870年に実用化に成功し、型紙刷りは1871~1882年に佐賀や美濃で再開され、銅版転写は明治中葉ないしは1887年に再開されたとされる⁽¹²⁾ものである。図示し得なかったが、絵付に酸化クロムや正円子を用いたもの、1991年に内堀の南西対岸に移設された「岡山縣病院」名を染付た皿なども含まれる。そのほか、型押し of 三田産青磁(812)、蝙蝠文の特異な色絵杯(813)、濃黄釉の淡路・珉平焼平碗(811)、復興九谷とみられる錦皿(814)も注目される。この珉平焼碗は、厳密な磁器というよりやや陶質的である。

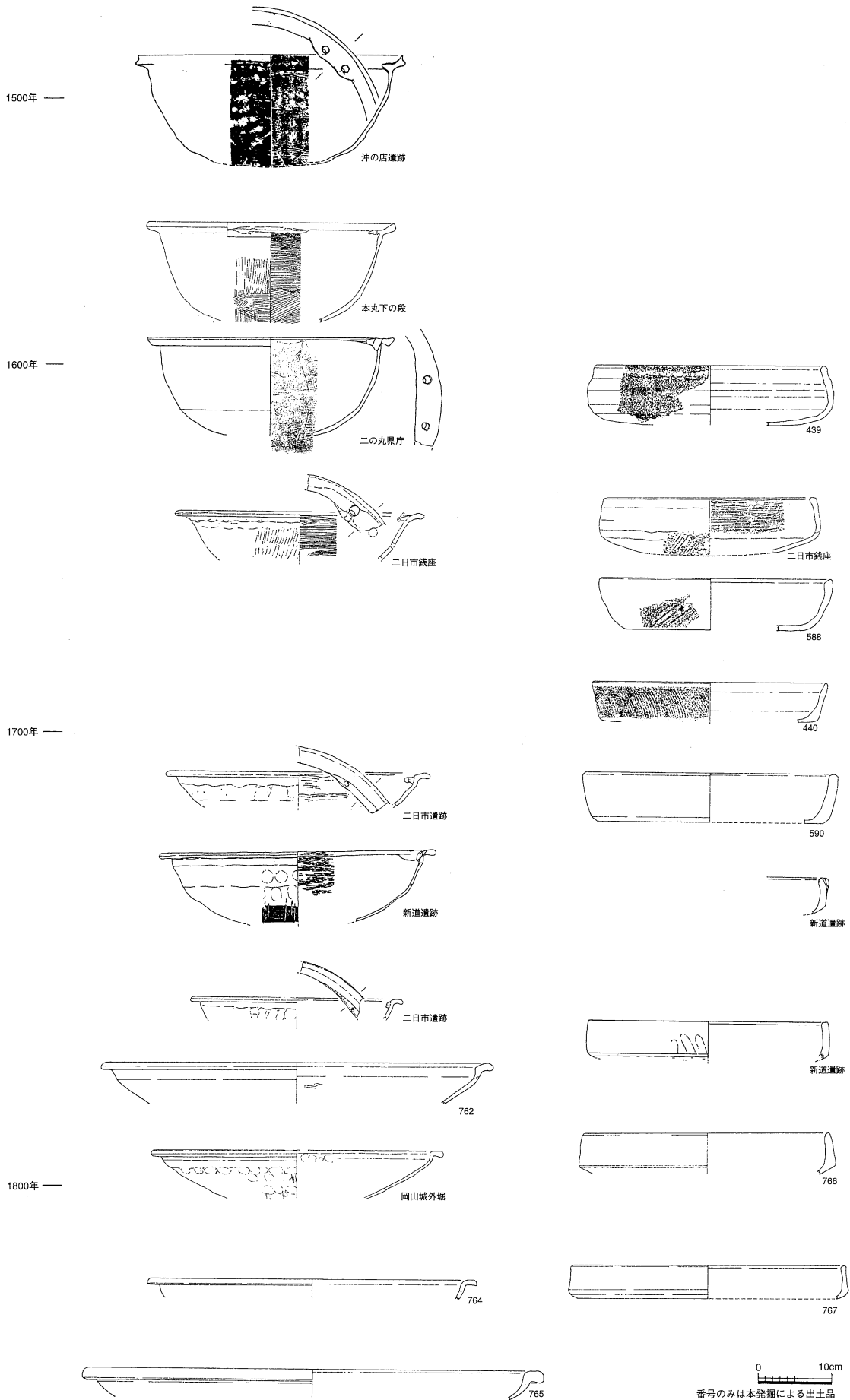
k. 土器皿

16世紀後葉~17世紀中葉までの製品を主体に大量に出土した。口縁に煤が付着して明らかに灯明皿として用いられたものもあるが、それだけとするには量が多過ぎ、儀式用の使い捨ての坏に供されたものも含むとみられる。回転糸切のものが圧倒的に多いが、16世紀末に遡るものを中心に手づくね成形品がある。土器皿は岡山城本丸や二の丸でも膨大量が出土する。やはり回転糸切が主体であるが、回転ヘラ切品や手づくね成形品も少量ある。二の丸(中電)では、金箔を貼ったものが1点出土し、その形態等は普通品と変わらないことから、全体としても儀式用の坏を含むことは確実である。16世紀後葉~17世紀中葉に至る変化として、手づくねやヘラ切品の減少、口径や深さの減少、底部と体部の境が段的なものの減少、器形・法量のバリエーションの減少、橙色・肌色・暗灰色・白色といった色調の併存から白色への一本化などが展望できるが、細かな特徴は多様で生産単位の複数併存が予想されるうえ、各生産単位とも数段階の法量規格があるなかで、総体としての法量の分布とその変化は混沌とし、明確に提示できる段階ではない。17世紀後半以降の土器皿も出土したが、前代に比べて激減し、たいていが灯明皿に供されたとみられる。この状況は城内他地点や周辺遺跡でも同様である。

l. 焼塩壺

焼塩壺(214・437・438・932)はS K 73・S K 23などから5点が出土したが、17世紀前葉~中葉の製品で、刻印が確認できるものはない。岡山城の他地点でも16世紀末~17世紀中葉の焼塩壺は散見できるが、岡山城出土の焼塩壺はそうした古い時期のものが多いといえる⁽¹³⁾。これらは、堺周辺で出土するのと同様な薄手の一群と、堺産とするには異質の厚手の一群に大別でき、後者は地元岡山産の可能性を考えてみる必要がある⁽¹⁴⁾。また、岡山城では17世紀後半以降の焼塩壺も出土し、例えば二の丸(県庁)では17世紀第3四半期の「天下一堺ミなど籐左衛門」印をもつもの、二の丸(中銀)では18世紀前半の「泉州麻生」印をもつもの、本丸下の段では「天下一堺ミなど籐左衛門」の刻印をもつものや18世紀末~19世紀前葉の産地不明品が出土している。対して、岡山城周辺の農村部では焼塩壺はほとんど出土せず、岡山といった都市、内でも藩主を頂点とする上流階級の食膳に関わる遺物といえる。

第V章 調査成果の整理と展望

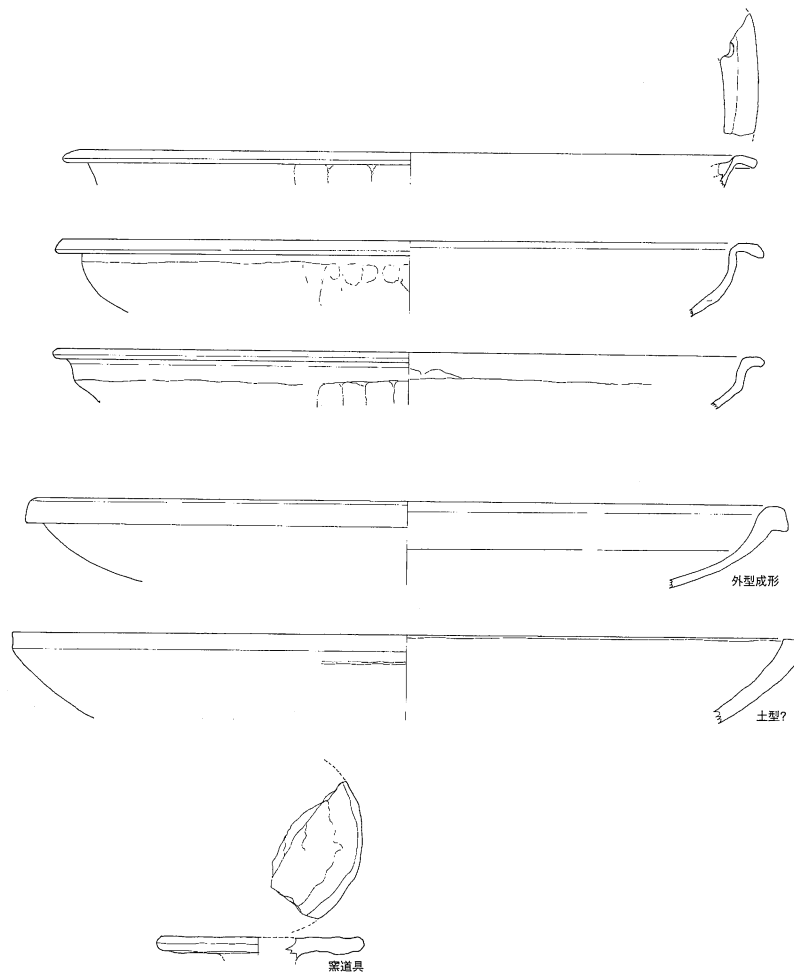


第112図 岡山城周辺出土の焙烙の流れ (1 / 8)

m. 焙烙 (第112図)

包含層や内堀から17点が出土した。口縁直交形の関西系(439・588・440・590・766・767)と口縁外折形の瀬戸内系⁽¹⁵⁾(761~765)に大別され、関西系には難波A・C・D・E類⁽¹⁶⁾がある。こうした焙烙は、岡山城各地点や二の丸、周辺遺跡などでも出土しているが、関西系は都市部、特に上級武家地に多く、農村部では瀬戸内系が卓越し関西系はほとんど入っていないといえる⁽¹⁷⁾。また、都市部でも17世紀代は関西系が目につくのに対し、以後は19世紀に向けて瀬戸内系の比率が増大する。例えば、藩主の住居である本丸では、全期を通じて関西系が10点以上出土しているのに、瀬戸内系は1点もない。また、本調査地は全体では17点中9点が関西系で両者はほぼ折半といえるが、相対的に古い遺物で構成される内堀埋土下部では関西系4：瀬戸内系1であるのに、新しい内堀埋土上部では関西系2：瀬戸内系7である。また、1640年下限の二日市銭座の資料では、関西系11：瀬戸内系1である。

岡山城で出土する関西系は、胎土や製作技法も含めて関西産と考えて良さそうであるが、農村部を含めると膨大とみられる瀬戸内系は、讃岐の御厩などでの生産が確認され⁽¹⁸⁾、それが岡山城下に流通していた可能性もある。しかし、岡山県下出土品の産地の最大候補は、備中西部の大原(浅口郡里庄町)である。ここでの土器・瓦質土器の生産は記録から確実に江戸中期まで遡り、それ以前から操業

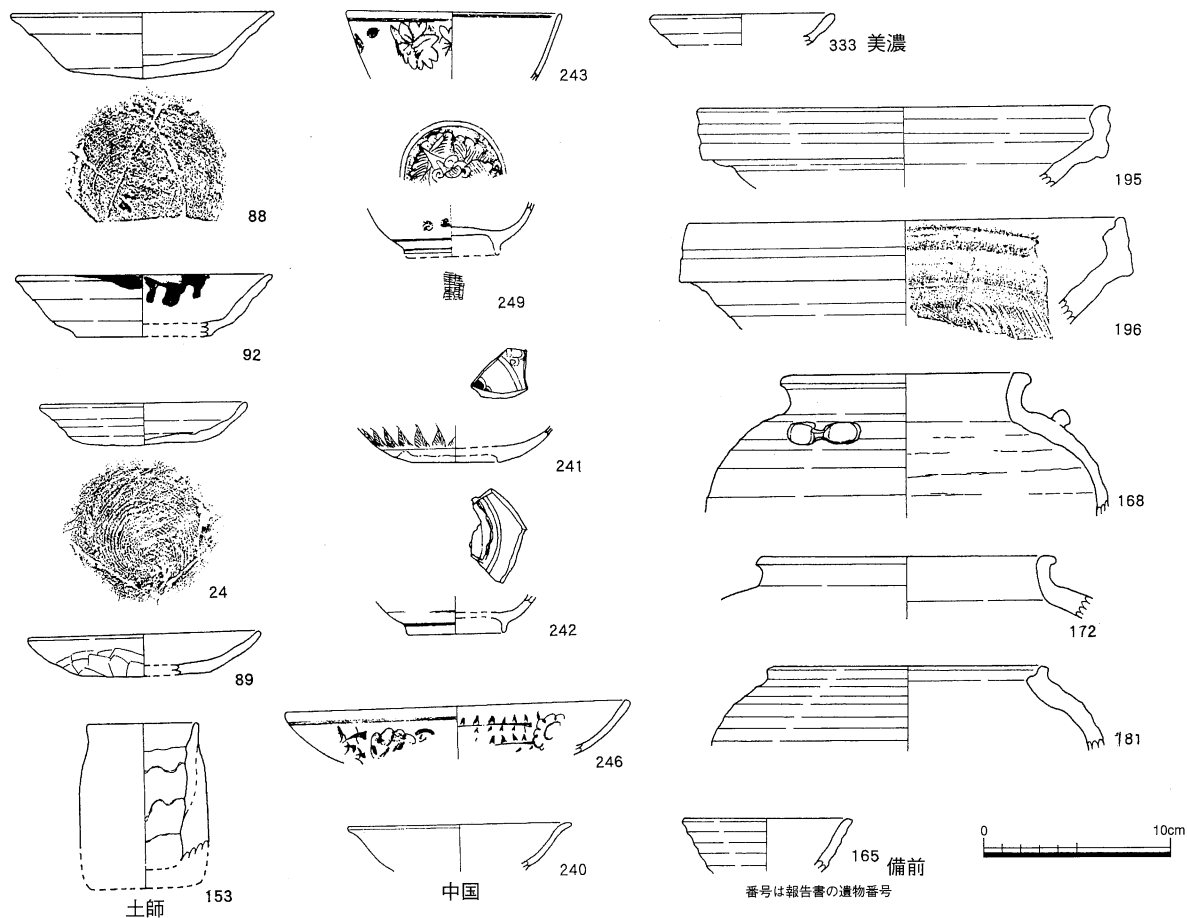


第113図 備中・里庄町大原採集の焙烙ほか (1 / 5)

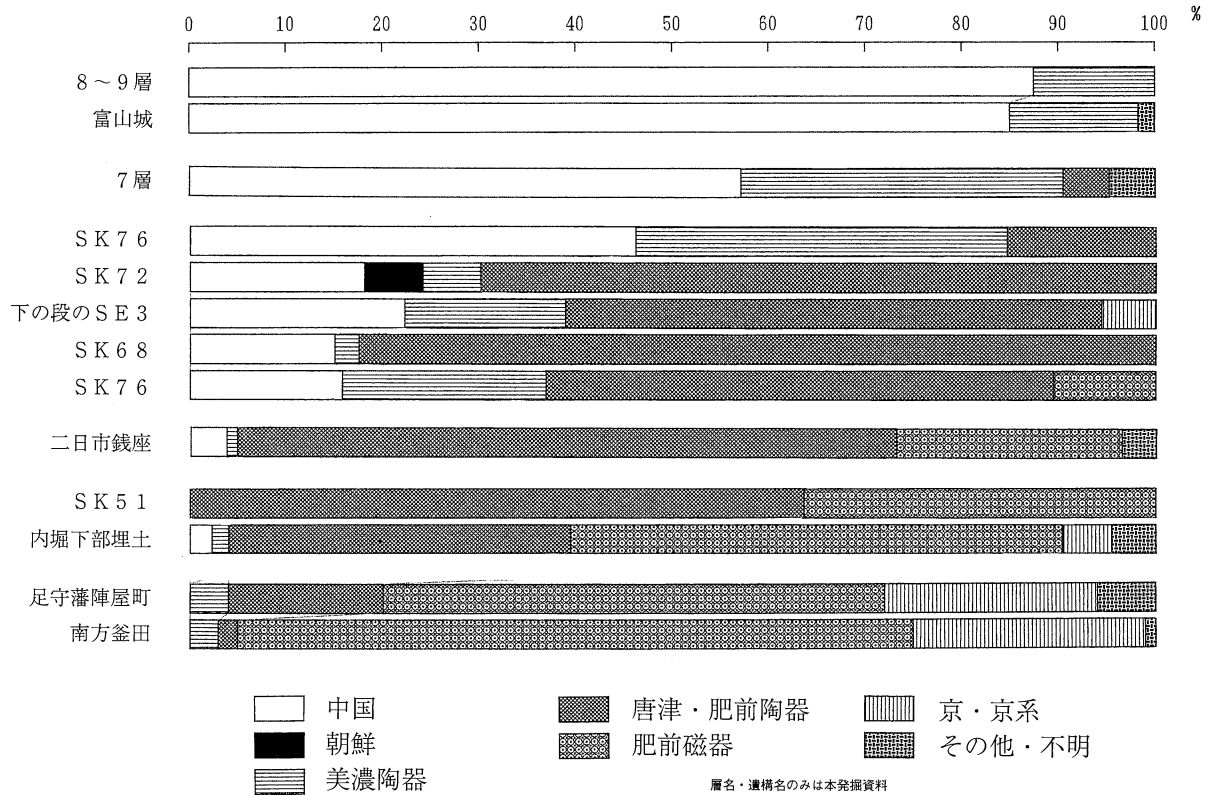
していた可能性も指摘されているし、明治初期の記録などから生産量の膨大さが窺え、瀬戸内沿岸諸国に広く流通していたことが判る⁽¹⁹⁾。焙烙はその主力製品であった。現に大原で採集できた遺物には、岡山城ほかで出土するのと同類の焙烙が確かに含まれている(第115図)し、大原に隣接する本谷遺跡(笠岡市)や積出港を控えた笠岡陣屋町内(笠岡市)では、普通の消費とは思えない比率で焙烙が出土しており、大原地域でこのタイプの焙烙が生産されたことは確実視される。その変遷の概要は、鍋形のものからの浅化が17世紀中頃にあり、以後は内耳とその穴が退化し、口縁の垂下傾向を強め、19世紀に入ったある段階で体部の外型成形が始まったものとみられる。

n. 土玩具

下部包含層から、手づくね犬形土製品(428)が1点出土した。畿内を中心に各地で出土する16世紀末の織豊期に特徴的な製品⁽²⁰⁾と同タイプである。一方、18世紀末~19世紀の型造り製品も4点出土した。総てが剥離材にキラコを用い、胎土から橙色のもの(551・552・759)と白色(760)のものに大別される。江戸後半期の土玩具は新道遺跡から多数が出土している。



第114図 岡山城本丸中の段出土の宇喜多秀家期の遺物 (1 / 4)



第115図 陶磁器組成の変化

2. 土器・陶磁器の組成 (第115図)

主要遺構などで出土した土器陶磁器の内訳は次頁の表の通りである。

表の右側二段目に示した「下層遺構全体」は、本調査地における17世紀前葉の状況を総合していると考えてよい。446点のうち土師質土器は46.0%を占め、そのほとんどは皿(全体の44.2%)である。およそ17世紀中葉以降の状況を示すとみられる内堀下部埋土の土器皿は全体の7.9%であるから、古い段階での土器皿の量は注目に値する。同じ時期に属する岡山城本丸下の段のSE3では、実に全体の91.0%が土器皿であった。こうした土器皿には先述のように儀式用の使い捨て坏を含んでいるとみられ、儀式の場を主体的に含む本丸の機能に即した状況といえる。二の丸の上級武家屋敷でもこの時期の土器皿は膨大量が出土する。

中国は下層遺構全体の8.5%、朝鮮は1.1%、美濃は4.0%、唐津は24.4%、肥前磁器は0.4%でこれらは碗・皿といった供膳形態が主体である。いっぽう備前は下層遺構全体の15.2%を占めて、播鉢・徳利・甕・壺など調理や貯蔵形態で卓越して、棲み分けが果たされている。

次に他遺跡も交えて16世紀後葉以降で備前焼などを除く施釉陶磁器(主に碗皿)に限った組成を、およそ年代順にグラフを並べてみると(第115図)、16世紀後葉の8~9(VIII~IX)層や富山城では、まだ肥前陶磁がなく中国が圧倒的に卓越し、1600年前後の7(VII)層で唐津が出現、17世紀前葉のSK76からSK69に至る下層遺構期の内で唐津に食われる形で中国が激減、美濃もさらに比率を下げたと理解できる。肥前磁器は下層遺構期の内に少量現れるが、増加するのは1640年下限(寛永半ば頃の状況か)の二日市銭座の資料群からで、以後同じ肥前産のうちで陶器を減じた形で肥前磁器が増大し、18世紀後半~19世紀を主体とする足守藩陣屋町や南方釜田遺跡の段階では肥前陶磁を蝕む形で京・信楽系の灰釉陶器が一定量を占めるに至っている。

3. その他の遺物

a. 木器

17世紀前葉の下層遺構を中心に、漆器碗、箸、折敷、下駄が出土した。漆器碗は近世のうちでは古い要素とされる、高台が高いもの(221・283・284)が含まれているほか、薄手でシャープな高級品(287・288など)や、体部に円紋をもつもの(285)がある。特にハレの場用とみられる内外面とも朱漆(221・287)の製品もある。箸(158～164・290)は図示したものは数点であるが、多数出土した。岡山城の他地点と同じく長さ21～26cm(8寸前後)のものが主体である。下駄は一木造りの連歯下駄(171～173・222～228・291・299)と差歯式でホゾ穴が台部を貫通する露卯下駄(174～176)があり、総て後の鼻緒穴を後歯の前にもつ型式である。子供用や漆塗のものもある。

b. 金箔おし瓦

遺存はごく僅かであるが確実に金箔をおした飾瓦(931)が1点出土した。内堀上部埋土中として取り上げた遺物であるが、本来は三之曲輪上の包含層に埋もれていた可能性が高い。金箔を押すことや形態・胎土・焼成などから16世紀末の宇喜多秀家期の製品と判断できる。金箔瓦は本丸ではこれまでに59点が出土しているほか、二の丸(中銀)と二の丸(中電)でも各1点が出土している。本丸外で出土する金箔瓦は、本丸以上に鬼瓦・飾瓦類に限定されるが、宇喜多秀家期には本丸以外にも金箔瓦を掲げた建物があった可能性が高くなってきた。特に今回の出土品は、さらに外方の三之曲輪内である。こうした瓦が町家に掲げられていたとは到底思えないから、宇喜多秀家期の三之曲輪域は武家地と町家が未分化であった可能性も示唆される。この飾瓦の文様は五弁の花文とみられ、五弁鉄線や桔梗にも擬せられるが花名は判然としない。いずれにせよ桐・沢瀉・剣酢漿草・「児」字ではないから、宇喜多家以外の家紋であった可能性が窺え、もしそうであれば宇喜多氏配下では家老以下の家臣までが金箔押し家紋瓦を掲げていたことになる。

軒丸・軒平瓦では、下層の各遺構で最新相のものは17世紀前葉の特徴を示し、先年提示した瓦の編年案⁽²¹⁾と整合している。また、16世紀末の中心飾三葉の軒平瓦(180・561)は、中の段(の10)・二の丸(中電)(の89)、下津井城(の5・倉敷市)、虎倉城(御津町)の各出土品と同範の可能性はある。

岡山城全体とすればコビキA技法による宇喜多秀家期の瓦は膨大量で、城下で既に瓦師が編成されていたとみられるが、そのコビキA段階に瓦と同質の専用土管が存在するのも、城下での瓦生産を傍証するものといえよう。コビキB期の瓦質土管は備中足守藩の陣屋町などでも出土している。

c. 牛角芯と埴塼

17世紀前葉でも終り近くのS K 68から出土した牛角(296)は、サヤが切開され芯だけとなっている。切開時に付いたとみられる傷も残り、動物遺存体のなかで角製品の製作を具体的に示すものとして注目されている遺物⁽²²⁾と同類のものである。ただ、本例の切削痕は斜めに短く残るだけで、堺環濠都市遺跡例⁽²³⁾の様な定型的な横筋ではなく、偶発的なサヤの採取であったのかも知れない。

また、下部包含層中から出土して16世紀末～17世紀前葉の製品とみられる埴塼(427)がある。ごく僅かに金粒が付着し、金製品の製作に用いられた可能性が高い。

4. 町人町〔上之町〕の遺物群

今回の発掘調査で出土した近世遺物は、基本的に三之曲輪内で用いられたと考えられる。

16世紀後葉～末(宇喜多期)の最下層段階では、三之曲輪域が総て町家であったのか、武家屋敷や職人家も混ざっていたのかは、掘立柱建物を検出したものの共伴遺物が少ないこともあって、特定することができなかった。ただ、上の層位であるが宇喜多秀家期の金箔おし瓦が出土し、三之曲輪域にこれを掲げる建物があつた可能性が示唆されること、上之町同様に初期城下町の形成があつた天瀬地区(江戸時代には武家地)で、文禄年間までは武家と商人が混住していたことを示す同時代性史料⁽²⁴⁾があることなどからすれば、宇喜多期の三之曲輪域に武家地があつた可能性は十分に考えられる。

しかし17世紀前葉以降の一带は、絵図などから山陽道に面した町家街であつたことは疑いない。したがって、下層遺構面以上から出土した遺物は、上之町の商人町の消費生活の一端を示すものである。特に17世紀前葉の遺物は多彩で、下層遺構を中心に大量に出土し、高い格式をもつた裕福な商家のイメージが浮かび上がる。例えば陶磁器では、渡来物を含む各地の製品があり、釉色も良いものも多くて、雑器のうちでは良品・高級品が目につく。特に、朝鮮王朝磁器茶碗、三足付鉢・建水様鉢など上手の備前焼、香炉様火入などは、茶の湯が行われたり、上等な座敷(接客空間)があつたことを窺わせる。また大量の土師質土器皿、焼塩壺、使い捨て箸、折敷、漆器碗(特に内外面とも朱漆のもの)の存在は、食生活の形態、あるいは会席宴を含む儀式祭礼が武家に準じた形で行われたことを示している。漆塗の子供用下駄や羽子板も、家の裕福さを示す遺物であろう。一方、牛角芯や埴塙は、商人の豊かな消費生活を支えた工人が、上之町内で活躍していた事を象徴的に示している。こうした遺物群の質は、二の丸の上級武家地跡で出土する同時期の遺物群と勝るといえども劣ることはない。

17世紀中葉以降の陶磁器も、雑器のうちでは良品・高級品が目につき、二の丸の武家地出土品に比べても同等かそれ以上、城下の下町や周辺農村部に比べれば明らかに勝つた内容で、藩の経済を支えた上之町の商人町の引き続いての繁栄を示している。ただ、17世紀初以後を通じてみれば、高品位の遺物が目立つのは17世紀前～中葉、ないしは江戸前半期といえ、江戸後半期における郊外流通拠点の形成と城下町経済の疲弊⁽²⁵⁾(含 市中人口の伸び悩み)と対応しているのかも知れない。

注

- (1) 青花の分類は小野正敏 1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』NO.2をベースとした、森毅 1995「一六・一七世紀における陶磁器の様相とその流通」『ヒストリア』第149号 による
- (2) 注1の森 1995と同じ。
- (3) 鈴木秀典 1991「大坂城跡の豊臣前期と後期」『関西近世考古学研究』I および注1の森1995 など
- (4) 藤澤良祐 2001「生産技術の変遷」『瀬戸大窯とその時代』瀬戸市埋蔵文化財センター
- (5) 大橋康二 1983「伊万里磁器創成期における唐津焼との関連について」『佐久間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集』
- (6) a 大橋康二 1984「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館ほか同氏の一連の著作
b 九州近世陶磁学界編 2000『九州陶磁の編年』
- (7) 積山洋 1993「大坂出土 17、18世紀の陶磁器」『近世陶磁器の諸様相』関西近世考古学研究会 ほか
- (8) 下村節子ほか 2001『枚方宿の陶磁器』枚方市教育委員会ほか
- (9) 稲原昭嘉 2000「明石播鉢の編年について」『近世の実年代資料』関西近世考古学研究会
- (10) 備前市教育委員会ほか 1998『備前焼紀年銘土型調査報告書』
- (11) 日下正剛 2000「大谷焼・源内焼」『四国・淡路の陶磁器』徳島城下町研究会
- (12) 成瀬晃司 2001「江戸から東京へ 陶磁器」『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- (13) 乗岡実 2000「岡山城出土の焼塩壺」『焼塩壺の旅—ものの始まり堺—』小谷城郷土館
- (14) 森村健一氏のご教示による。
- (15) 佐藤龍馬 2001「瀬戸内沿岸地域からみた讃岐の焙烙」『四国と周辺の土器-焙烙の生産と流通』徳島城下町研究会
- (16) 難波洋三 1992「第6節 徳川氏大坂城期の焙烙」『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会

- (17) 乗岡実 2001「岡山」『四国と周辺の土器-焙烙の生産と流通』徳島城下町遺跡研究会
- (18) 佐藤龍馬・濱野圭司 1995「近世讃岐における土器生産」『研究紀要』Ⅲ 香川県埋蔵文化財センター
- (19) 坂本輝正 1990『大原焼』里庄町
- (20) 嶋谷和彦 1991「織豊期の犬形土製品」『関西近世考古学研究』Ⅰ
- (21) 乗岡実 2001「第Ⅴ章第4節 瓦について」『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』
- (22) 松井章 2000「斃牛馬利用の動物考古学的考察特に牛角の利用について」『動物考古学』第14号
- (23) 松井章 1997「堺環濠都市遺跡(SKT78地点)出土の動物遺存体」『堺市文化財調査概要報告』第61冊 堺市教育委員会
- (24) 斉藤一興(岡山藩士) 1793『黄薇古簡集』(岡山地方史研究連絡協議会1793『黄薇古簡集』に収録)
- (25) 藤沢進 1957「商品流通からみた城下町岡山と在」『大名領国と城下町』

他地点・周辺遺跡の文献など

岡山城

本丸中の段：岡山市教育委員会 1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』

本丸下の段：岡山市教育委員会 2001『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』

二の丸(県庁)：岡山県教育委員会 1991『岡山城二の丸跡 岡山県庁舎増築工事に伴う発掘調査』

二の丸(中銀)：岡山市教育委員会が主宰する中国銀行本店建設事業埋蔵文化財調査委員会が1990年に発掘調査を実施。

二の丸(中電)：中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会 1998『岡山城二の丸跡 中国電力内山下変電所建設に伴う調査』

外堀：岡山県古代吉備文化財センター 2001『天瀬遺跡・岡山城外堀跡』

二日市遺跡：出宮徳尚 1985「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』35 1982年版ほか

新道遺跡：岡山市教育委員会 2001『新道遺跡』

南方釜田遺跡：岡山市教育委員会が主宰する調査委員会が1986～87年ほかに発掘調査を実施。

周匝茶臼山城：岡山県吉井町教育委員会 1990『備前周匝茶臼山城址発掘調査報告』

富山城：岡山市教育委員会 1969『富山城跡第2次調査報告』

足守藩陣屋：岡山市教育委員会 1995『足守藩武家屋敷跡』

虎倉城：乗岡実 2000「中世山城の瓦三題」『吉備 されど吉備』古代吉備国を語る会

下津井城：藤原好二 2000「山本慶一氏寄贈の資料Ⅰ」『倉敷埋蔵文化財センター年報』7

本谷遺跡：笠岡市教育委員会 1987『本谷遺跡』

笠岡陣屋内の遺跡：笠岡市教育委員会(安東康宏氏担当)が調査を実施。

各種遺物の理解については、52頁に掲げた各文献も参照した。

第3節 近世備前焼播鉢の編年案

今回の発掘調査では近世の備前焼が多数出土したが、うちでも播鉢の存在は目立っている。考古学の立場から備前焼の編年^①を大成したのは間壁忠彦・間壁葎子の両氏である。それは平安後期から江戸時代前期をI期からV期(ないしはVI期)に分けるもので、広く活用されている。しかし、江戸時代前期以降の編年作業はこれまであまり進んでおらず、根木修氏による検討成果^②もあるが、状況はまだ混沌としている。近年は生産地での調査^③や編年研究を廻る動向^④に進展があり、それらも踏まえて、近世備前焼(間壁V期後葉以降)の播鉢に限った編年案を叩き台として提示しておきたい。

1. 近世1期(16世紀第2四半期末～17世紀初)

中世来の放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されるものが出現し、かつそれが主体を占める段階である。見込にスリメを入れることも一気に普遍化する。ナナメ方向のスリメは、上からみて口縁側が反時計方向に延びるのを専らとするが、これはすり粉木を時計廻りに回転させる場合の必然的な方向である。器面の塗土や火襷は、原則として認められず、褐紫色～暗赤褐色に発色するものが多く、よく焼き締まり、黄ゴマが掛かる個体もしばしば目にする。

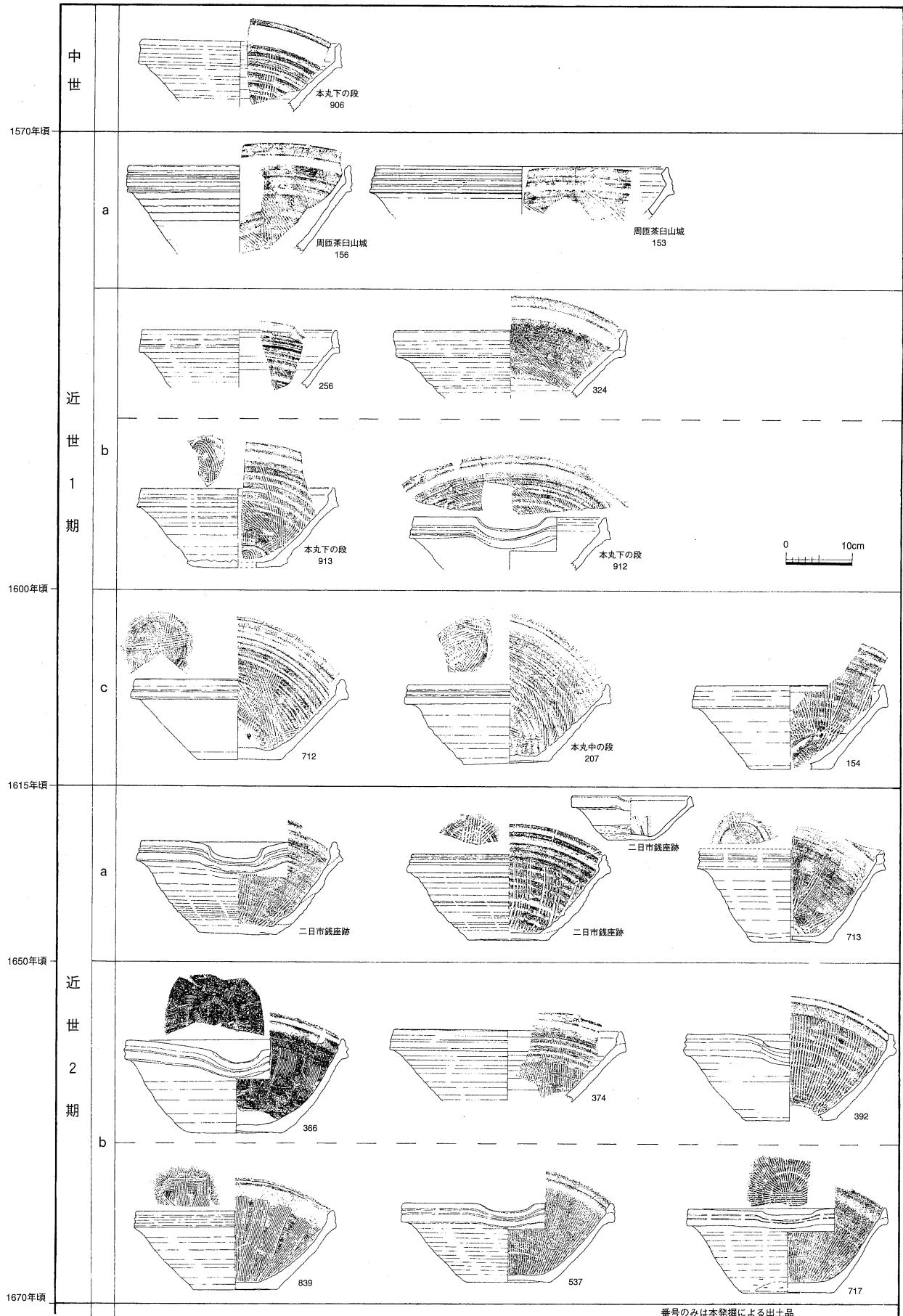
a期・b期は、口縁帯が中世に引き続いて薄板作りでかつ高く、全体の作りも備前焼播鉢の変遷過程のうち最も繊細でシャープな段階で、口縁外面の凹線は3～4と多条なものが含まれる。口端を摘み上げ状に小さく押えた結果、内面の口縁直下に稜をもち前段階の中世末によくみられた形態のものをa期、口縁内を強く押えた結果、口端が先細りとなり、口端から下がった位置に稜もしくは段をもつものをb期に分類したが、両者を本当に時期差として捉えうるか否かは、今後の検討課題である。

b期新相、さらにc期では、器高を減じ、口縁は厚く、立上りが低くなって萎縮し、凹線は2条に定型化する。特にc期には、口縁下の顎が張り断面が三角形となるものが目立っている。こうした形態は、口縁で重みを受けて重焼をするに際してのb期までの欠点を克服し、強固な口縁を追求するとの本旨に立ち返った結果と評価できる。スリメはc期には、かなり高密度なものも出現している。

なお、近世1期には少量とはいえ放射スリメのみの一群も存在すると考えたほうが良さそうである。また、見込スリメのパターンは、初源は+形の可能性があるが、○形、△形、*形なども加わって多彩である。後に主体となる*形はb期には成立しているが、まだ主流ではない。胎土は、a期からb期の古い段階までは、暗褐紫色で砂粒が少なくねっとりした感じの微粒のもの(田土)が多いが、以後は暗灰色系で黒色鉱物粒などを含む粗めのものが目立ってくる。

スリメの高密度化、分厚く頑丈な口縁、口縁帯の2条凹線などは、以降の段階に引き継がれて行く要素であり、こうした近世的要素の出現という点で、近世1期の意義は名実共に重大である。

暦年代を考える資料として、1b期古相品では1580年銘土器などと共伴した姫路城大天守地下^⑤や1585年の焼打ちを下限とする根来寺坊院跡^⑥の出土品、近世1b期の新相品については1598年の三の丸造成を下限とする大坂城の豊臣前期の遺物群^⑦、近世1c期については1515年の大坂夏の陣焼土層を下限とする大坂城豊臣後期の遺物群や同じく堺環濠都市の遺物群^⑧、それに1620年代を下限とする岡山城本丸中の段第IVb期の層位の出土品^⑨などがある。また生産地では1b期の資料として備前南大窯東3号窯^⑩、1c～2a期の資料として備前南大窯西2号窯^⑪の出土品がある。



第116図 近世備前焼播鉢の編年その1 (1/8)

2. 近世2期（17世紀前葉～第3四半期）

ナナメ方向のスリメがなくなり、再び放射状のものだけになる段階で、この期の過程を通じてスリメが完全に詰まる。口縁帯外面の凹線は既に2条に定型化しているが、沈線の多いものが多い。焼成は依然として良く焼締まり、器面は褐紫色～暗赤褐色、断面は暗灰色に発色するものが多い。

a期では、1c期に続いて、口縁が厚く、下顎の張出しが顕著で断面三角形に近いものもあるが、1c期にあったような極端に萎縮した口縁はかえってみられない。口縁下内面に丸みをもった突起が明瞭なものが多い。スリメは十分に間隔を置き、口縁近くまで及ばないものもある。胎土は1c期に続いて黒色鈹物粒を含むものがある。

b期の口縁は、やや薄めとなって、下顎部の張出しが弱まり、口縁下内面の突起は退化傾向にある。スリメは相当に詰まり、b期の内に江戸中期・後期の水準に到達してしまう。見込スリメも同様に高密度化するが、そのパターンはa期では多様であったのに、b期では＊形に定形化してくる。b期の新相品は、体部外面は依然としてロクロメによる凹凸があり、ヘラケヅリなどによる平坦化は行われていないが、底面は整ったベタ底になっている。以前の底面は、粘土のはみ出しや指頭圧痕・ロクロ台圧痕などが顕著に残って凹凸が激しかったのと対照的である。ただし、底部板起こしの成形法そのものは変化ない。胎土はb期にも黒色鈹物粒を含むものがあるが、次第に減ってくる。

近世2期では器面への本格的な塗土はまだないが、ナデ調整を受けた表皮(友土)が塗土的な効果を生み出し、ごく薄い表皮のみが一様に暗紫褐色系に発色するのに、断面は暗灰色系のことが多い。火襷きはほとんど観察されないが、a期を中心に黄ゴマが掛かる個体がある。近世2期までは口縁の上端と顎部に重焼き時の熔着痕が顕著に観察できる。

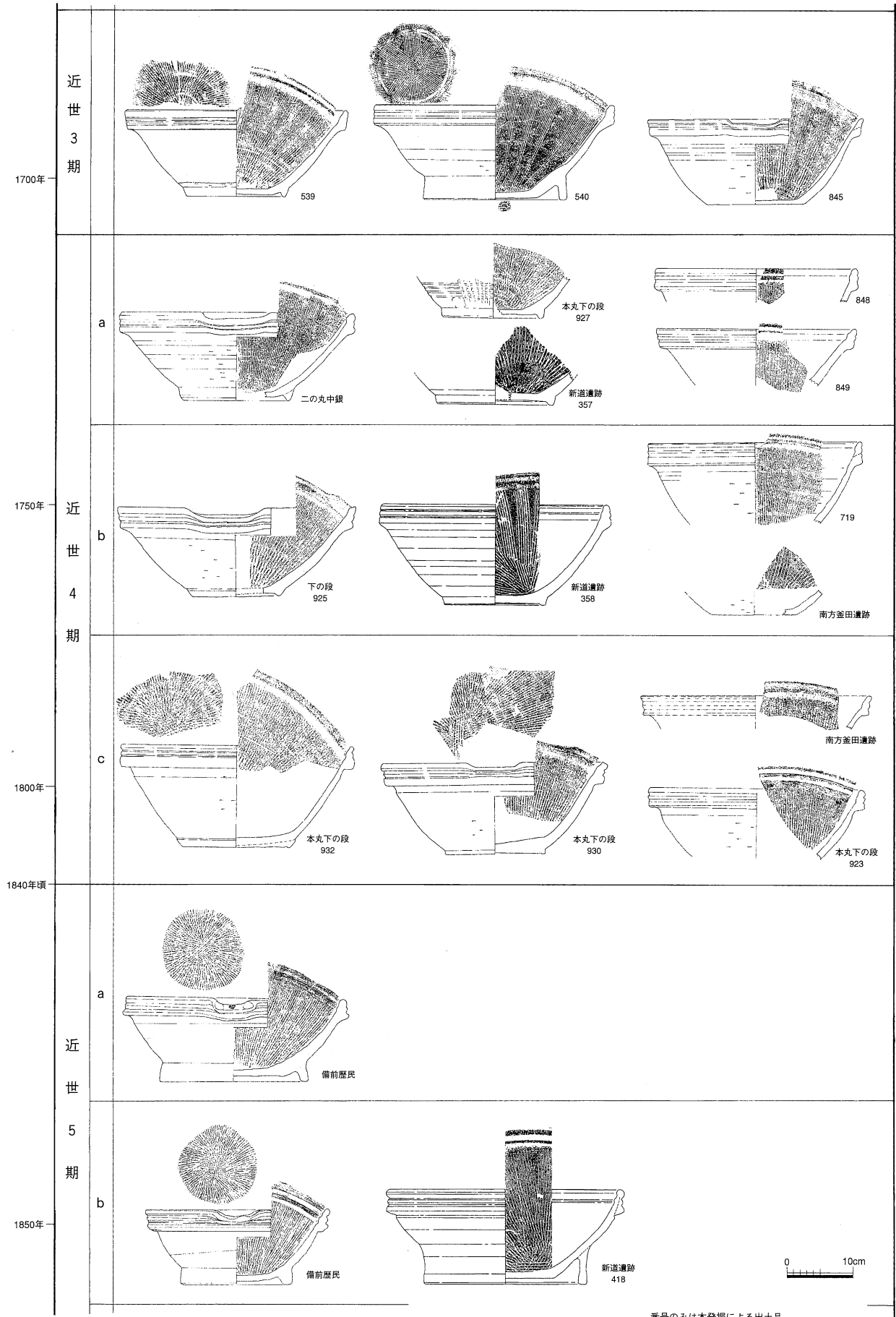
また、口径16cm級の小形播鉢もあり、法量分化の進展が窺える。小形品は中形品に先駆けて外面体部下半にケヅリを施すものがあり、スリメは中形品よりクシ原体が細くてシャープなものが多い。

a期の暦年代を考える資料として、1640年下限の二日市遺跡銭座跡出土品⁽¹²⁾、1654年の承応洪水を下限とする岡山城二の丸(中電)出土品⁽¹³⁾などがある。

3. 近世3期（17世紀第4四半期～18世紀初）

高台をもつ器形が出現し、それが量の主体をなす段階である。体部はロクロメが目立たず平滑となり、塗土が一般化する。この塗土は、胎土同様に鉄分を含む友土を、釉薬の効果を期待して口縁から内面、あるいは外面から内面全体へ塗り込むものである。塗土に加えて、酸化炎気味の焼成と焼締度の低下が連動し、器面は暗茶褐色～暗褐赤色、断面は明褐色系統と以前より明色のものが多くなり、器面が暗褐紫色で断面暗灰色のものは激減する。また体部外面に火襷が顕著なものを多く含み、2期にはあった黄ゴマが掛かる個体はほとんどみなくなる。スリメは詰まっている事に変わらないが、従来は原体が木グシ様で沈線が太めであったのに対し、原体が金グシ様で沈線が細くて深いものが目立ってくる。見込のスリメは＊形にほぼ定まっている。口縁は、内面の突帯がさらに退化して、全く平坦なものもあり、口縁下の顎部張出しは弱まってナデ肩状のものが目立っている。高台内や注口部に刻印を施したものも出現する。こうした変化は、他の施釉陶器の動向とも連動した、整美化・繊細化に違いなく、備前焼播鉢における元禄前後の変革の結果と評価できよう。

主流形態は、底部外端に断面逆台形の低い高台を貼付るもので、これが大坂堂島や初期の堺産播鉢のモデルとなったとみられる。また体部下寄りに円筒形の高台を貼付るものもあるが、作りが丁寧で



番号のみは本発掘による出土品

第117図 近世備前焼播鉢の編年その2 (1/8)

高級品であろう。高台を持たないものもあるが、その底面はおのずと整美なベタ底となっている。

また近世3期は体部のヘラケズリが一般化する段階である。以前でも余分な粘土を整えるために軽くケラケズリを施すものがあったし、小形品では既に体部下半にヘラケズリを施すものがあったが、それは偶発的であったり限定的であった。この期に出現した高台をもつ個体では、ヘラケズリがたいてい高台内に施され、一部は高台脇に及んでいる。これは高台の貼付けに先立つ工程として貼付面を整える意味あいと、体部を整美に仕上げる意味合いをもっている。ただし、この3期では体部の過半に及ぶものはまだ少なく、前者の意味合いが強いものが多い。ヘラケズリは正位に置いて砂粒が左に動く方向で、砂粒が右に動く堂島・堺・明石産播鉢と異なっている。

重焼きの方法に関連しては、2期に続いて口縁上端と顎部に顕著な熔着痕を残すものもあるが、その熔着痕の痕跡が弱いもの、合わせて見込斜面や高台下角・底面外角にも熔着痕をもつもの、見込斜面や高台下角・底面外角のみに熔着痕をもつものがあるが、製品を直接に重ね焼きする点は変わらないが、重量を受ける部位が高台と体部に移りつつあることが分かる。

近世3期の製品は江戸⁽¹⁴⁾でも散見され、暦年代を考える資料に、1698年下限の江戸尾張藩麴町邸跡の出土品(筒形高台)⁽¹⁵⁾や江戸遺跡の東大編年Ⅲb～Ⅳb期の資料⁽¹⁶⁾などがある。

4. 近世4期(18世紀中葉～1840年頃)

体部外面のヘラケズリは、高台の有無や形態にかかわらず、上半まで及ぶのが普遍化する。とくにb・c期には胎土に石英粒などを含み、ケズリ痕が粗くて深いものが目につく。

高台をもつものが圧倒的で、無いものが主流である併行期の堺・明石産播鉢と大きな違いとなっている。断面逆台の低い高台をもつものが引き続いて主体をなすが、これは時期を追って退化する。すなわち、a期では3期よりも畳付が狭くなったものを含みつつ、まだしっかりした造りであるのに、b期には高台内が相当に浅くなり、c期には貼付ベタ底の外寄りに沈線を廻らせて畳付の痕跡を区画する程度となっている。3期の筒形高台や次の5期との関連で高い高台を持つものもあるかも知れないが、今のところ実体は不明である。高台の無いベタ底のものも、少量ながら併行してある。

口縁内面は平滑なもののほか、浅い凹線状のクセを持つものがある。口縁帯外面の凹線はb期までは近世2期から続く沈線的なものが多いが、c期には粗大化する。またb期までは鑊部の張出しが弱くナデ肩状のものが多いが、c期には鑊が張出し三角形のものが目立つ。これは、高台が退化し、重焼き時の重みを再び口縁で受ける必要があったことと、連動するかも知れない。注口部は退化傾向にあるとはいえ、堺・明石産播鉢に比べればしっかりしている。

スリメは引き続き細線がいっばいに詰まるが、3期のような極端に鋭く深い条線をもつものはさほどない。また、スリメの上で見込部と体部を区別する意識は薄れ、口縁に続く施文は見込の中央から始まり、重複して見込で完結する交差文を施すものが一般化し、粗雑化が読み取れる。なお、口縁部に一旦及んだスリメをナデ消すことは原則としてなく、堺・明石産播鉢と異なる。

器面の塗土(ナデによる友土コーティング)は一般化していて、a期あたりはまだ茶褐色に発色するものが多いのに対し、b期以降はエビ茶色に発色するものが多くなり、断面色は明褐色もしくは暗赤褐色が主体となる。またb期以降は焼締め程度が急激に低下し、使用による摩耗で胎土の生地が露呈したり、塗土が膜状に剥げ落ちていることがある。口縁から体部にかけて火襻は続いてあるが、周囲との色彩差が乏しくなっている。

近世4期の消費地資料は岡山県下を除いて乏しいが、岡山城の内外ではけっこう出土例がある。暦年代を示す決定的な資料はないが、コンニャク印判手、陶胎染付、青磁染付、あるいは高高台といった18世紀から19世紀前葉の肥前磁器などと良く共伴している。

5. 近世5期(1840年頃～明治初め)

引き続き高台をもつものが圧倒するが、近世4期を通じて退化の一途をたどった高台の姿はなく、高くまた畳付が広いしっかりした高台に取って代わる。この一点をとっても、近世5期(天保窯導入期)の備前焼が旧来を刷新し新しい要素を受け入れたことが判る。併行期の堺・明石産播鉢とは既に異質の感が強い。

高台形はバリエーションに富むが、a期としたものは高台が高く踏ん張りも大きく、しだいに退化し、c期としたものでは低く断面逆台形となり、蛇目高台風のものも現れる。

体部は内湾気味で、ボール形に近く、外面のヘラケズリは引き続き認められるが、塗土や二次的なナデで消えて観察されないものも多い。口縁内面は概形では体部から連続的な曲線を描くが、細かくみるとa期・b期では凹線風のクセをもつものがあるのに対し、c期は平滑となる。また、a期・b期では口縁外面の凹線が引き続き粗大で深く、また分厚くて頑丈な口縁をもつものが多いが、c期では外面の凹線がナデ窪み状に退化し、口縁全体が華奢な造りとなっている。この変化は、口縁帯成形が従来の粘土帯上乘せ式から、口端側部への粘土貼付式に変化した事と対応している。注口はずいぶん幅が狭くなっているが、きちっと垂下させて機能性をまだ保っている。

スリメの太さは3・4期と同様のもの、それより太めのものもあるが、鉄クシ様の原体による相当に細かなものもあり、c期にはそれが主体となる。また備前焼の播鉢は口縁下のスリメをナデ消さないのが原則であったが、a期からナデ消すものが散見されだし、c期にはそれが普遍化する。スリメをナデ消さないものでも、上端は高さがよく揃えられ、口縁付近でも隙間なくスリメが施される点は、近世4期との違いといえる。見込では、口縁へと延びるくスリメが見込の中央から始まって激しく切合い、特にc期では見込で完結して図形を描くスリメが全く施されないものが多くなる。また、それを施すものでも従来の＊形はあまりみかけなくなり、痕跡的であったり、逆に工人の好みで任意に入れたような独自形のものがある。

焼成は連房式の天保窯の導入とも関連して4期よりさらに焼締度の低いものが多く、胎土は4期より微粒で精製されているが、砂粒が溶けずに破断面がざらっとしたものが多い。また塗土を施し、酸化炎焼成で器面が暗褐色～赤褐色に発色するものが多い。c期には塗土を施さずに器面・断面とも同じ明褐色～オレンジ色のものが増えてくる。火襷は、引き続きよく認められる。

窯詰に関連しては、高台外角と見込斜面に顕著な熔着痕を残す一方、口縁での熔着痕はみられなくなり、高台と体部での重ねが絶対化する。これは高台の大形化と口縁の強度低下と連動する。

ここでは近世5期を3分したが、その変化は出土層位や共伴遺物で裏付けられたわけではなく、今後の検証が必要である。この期の全般にわたる生産地資料として南大窯西1号窯⁽¹⁷⁾の出土品があり、詳細な検討が期待できる。なお、南大窯西1号窯での主力器種は播鉢であるのに、近世5期の消費地出土例は遠隔地ではほとんどなく、岡山城下で知られているに過ぎない。その一方、備前地域の郷町や農村では伝世品として見かけることが多い。他地域で関西産にシェアを奪われた備前焼播鉢は、自国の内需拡大に活路を見出したといえるかもしれない。

6. 近代

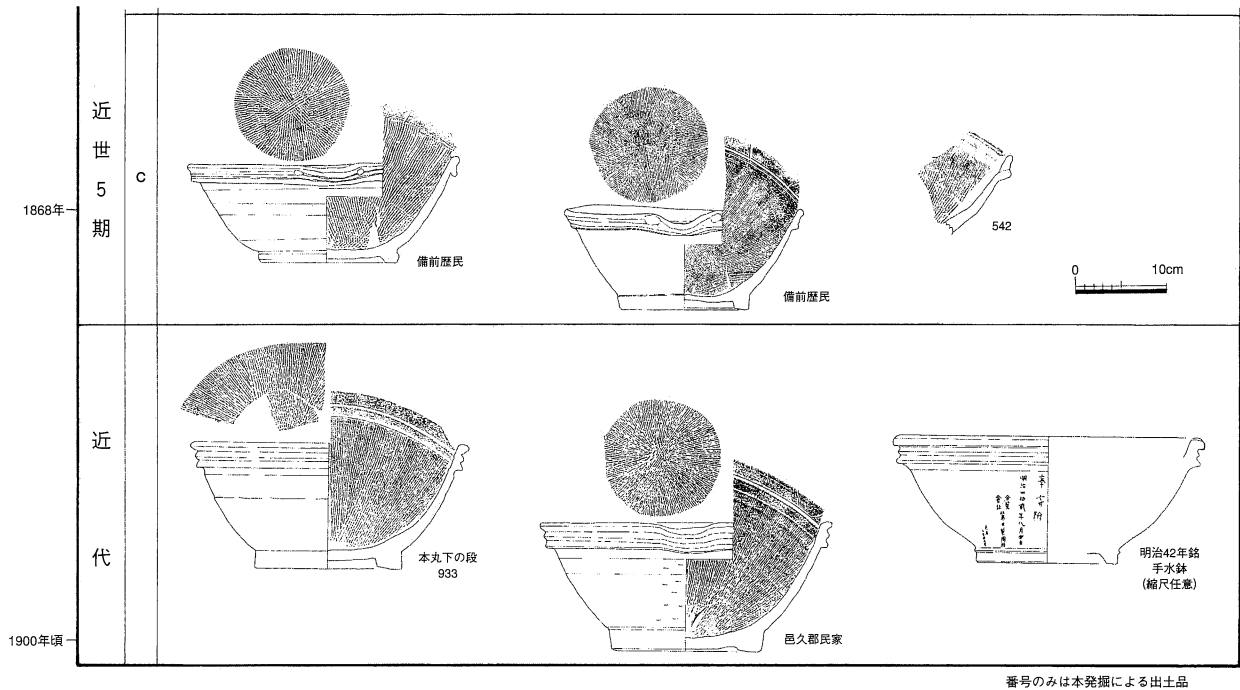
明治～大正期の播鉢や参考となる1909年銘の播鉢形手水鉢⁽¹⁸⁾は、近世5期に引き続きいて、体部がボール形で、断面逆台形の高台をもつ。口縁上端には水平に近い面をもち、口縁帯外面の凹線は粗大である。これは、口端をいったん逆L字に成形し、その口端の下方に突帯二本をもつ薄い粘土を貼付することで、二条凹線を作り出した結果である。注口はかなり退化しているが、まだ体裁を保っている。スリメは、口縁側端がナデ消しによって揃えられ、見込みでは体部へ続くものが切り合い、その切り合い部を調整するために見込みで完結するスリメを僅かに入れることもある。体部のヘラケズリ痕が観察できる個体では、砂粒が左に動いており、近代に入ってもケズリ(ロクロ回転)の方向に変化がなかったことが判る。大窯・天保窯の廃止と個人窯の成立とも連動し、焼締度は低い。胎土には砂粒をけっこう含み、器面・断面とも明褐～オレンジに発色し、塗土はないが、火襷はよく観察される。

消費地では他地域産の播鉢に比べて少ないが、旧岡山城下で出土が確認できるほか、備前地域の郷町や農村で伝世品としてよくみかける。

注

- (1) a 間壁忠彦・間壁霞子 1966・1966・1968・1984「備前焼研究ノート」(1)(2)(3)(4)『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18
b 間壁忠彦 1991『備前焼』考古学ライブラリー60 ニューサイエンス社
c 伊藤晃・上西節雄 1977『日本陶磁全集』10備前 中央公論社
d 伊藤晃 1995「備前」『概説 中世の土器・陶磁器』 など
- (2) 根木修 1984「近世備前焼の変遷と年代観」『木村コレクション古備前図録』岡山市教育委員会
- (3) 備前市教育委員会が1995～1997年度に行った備前焼記念銘土型調査(備前市教育委員会1998 『備前焼記念銘土型調査報告』)や備前市教育委員会が1999～2002年に行った史跡南大窯隣接地での発掘調査成果。
- (4) 1999年に発足した中近世備前焼研究会での検討成果(中近世備前焼研究会 2000『第3回中近世備前焼研究会資料』)など。
- (5) 秋枝芳 1988「姫路城大天守地下出土遺物の再検討」『網干善教先生華甲記念考古論集』同記念会
- (6) 和歌山県教育委員会・和歌山県文化財研究会 1981『根来寺坊院跡』昭和55年度ほか
- (7) a 森 毅 1992「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会
b 鋤柄俊夫・森毅 1993「豊臣期大坂城跡における三の丸築造以前の基準資料」『大阪市文化財協会 研究紀要』第2号
- (8) a 土岐市美濃陶磁資料館編 1996『堺衆のやきもの』ほか
b 永井正浩 1999『堺環濠都市遺跡出土の備前焼資料』第1回中近世備前焼研究会レジメ
- (9) 岡山市教育委員会 1997『史跡岡山城本丸中の段発掘調査報告』
- (10) 備前市教育委員会 1999『伊部南大窯跡西隣接地発掘調査現地説明会資料』
- (11) 備前市教育委員会 2000『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査現地説明会資料』
- (12) 出宮徳尚1985「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』35 1982年版ほか
- (13) 中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会1998 『岡山城二の丸跡』
- (14) 堀内秀樹 1992『備前系焼締め播鉢』の系譜』『東京考古』10
- (15) 新日本製鐵株式会社・紀尾井町6-18遺跡調査会 1994『尾張藩麹町藩邸跡』
- (16) 堀内秀樹 1996「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年的考察」『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題』II 江戸陶磁器研究グループ
- (17) 石井啓 2000「伊部南大窯周辺窯跡群の出土遺物について」『第3回中近世備前焼研究会資料』
- (18) 備前焼記念銘土型調査委員会・備前市教育委員会1998 『備前焼記念銘土型調査報告』

本稿は中近世備前焼研究会での発表をもとにしており、参加者全員による検討成果に負う部分が大きい。生産地を所管する備前市教育委員会の石井啓氏からはとくに多大なご教示と助成を戴いた。また、関西系播鉢の理解については52頁に掲げた文献を参照した。



第118図 近世備前焼播鉢の編年その3 (1/8)

図の出典など

番号のみは岡山城三之曲輪跡出土の本報告書記載品。

他遺跡の番号も各報告書などの遺物番号。

本丸下の段：岡山市教育委員会 2001『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』

本丸中の段：岡山市教育委員会 1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』

周匝茶臼山城：岡山県東部の吉井川中流部にあり天正7年廃城と伝わる中世山城。岡山県吉井町教育委員会 1990『備前周匝茶臼山城址発掘調査報告』

二日市銭座：岡山城下の南端付近に当たり、1637～1640年に銭座が操業。1982年に岡山市教育委員会が発掘調査を実施。(出宮徳尚1985 「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』35 1982年版 ほか参照)

二の丸中銀：岡山城二の丸跡の上級武家屋敷に当たり、1990年に岡山市教育委員会が主宰する調査委員会が発掘調査を実施。

新道遺跡：岡山城下の南部の下級武家屋敷。岡山市教育委員会 2001『新道遺跡』

南方釜田遺跡：岡山市教育委員会が主宰する調査委員会が1986～87年ほかに発掘調査を実施。

備前歴民：備前市立歴史民俗資料館保管の伝世品。原図は石井啓氏による。

邑久郡民家：岡山市神崎の根木俊三氏宅の伝世品。

年銘手水鉢：備前焼記念銘土型調査委員会・備前市教育委員会1998 『備前焼記念銘土型調査報告』

報 告 書 抄 録

ふりがな	おかやまじょうさんのくるわあと おもてちょういっちょうめちくしがいちさいかいはつびるけんせつにともなうはくつちょうさ							
書名	岡山城三之曲輪跡 表町一丁目地区市街地開発ビル建設に伴う発掘調査							
編著者名	乗岡実							
編集・発行機関	岡山市教育委員会 (文化財課 岡山市埋蔵文化財センター)							
所在地	〒703-8284 岡山市網浜 8 3 4 - 1 tel 086-270-5066							
発行年月日	2002年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
おかやまじょう 岡山城 さんのくるわあと 三之曲輪跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 おもてちょう 表町一丁目 4番183	33201	……	34度 39分 43秒	133度 55分 57秒	1989.3.20) 1989.6.30	660	市街地再開発 ビルの建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
岡山城 三之曲輪跡	城跡	中世末 近世	内堀石垣 掘立柱建物跡・ 井戸・ゴミ穴・ 暗渠	中国青花・唐 津・初期伊万 里を含む各種 陶磁器 漆器碗・下駄 金箔おし瓦	<ul style="list-style-type: none"> ・ 明治になって埋められた岡山城三之曲輪の内堀石垣を江戸時代の絵図と一致する位置で検出。 ・ 三之曲輪内で16世紀末から17世紀前半を中心とした屋敷地関連の遺構を検出。 ・ 膨大量の陶磁器が出土。 			

1. 内堀南区の上層石垣



2. 内堀北Ⅰ区の上層石垣



3. 内堀北Ⅰ区の上層石垣と下層石垣





1. 内堀南区・北 I 区の下層石垣



2. 内堀南区の下層石垣
細部



3. 内堀北 I 区の下層石垣
全景

1. 内堀北 I 区の下層石垣北部



2. 内堀北 I 区の下層石垣北端部

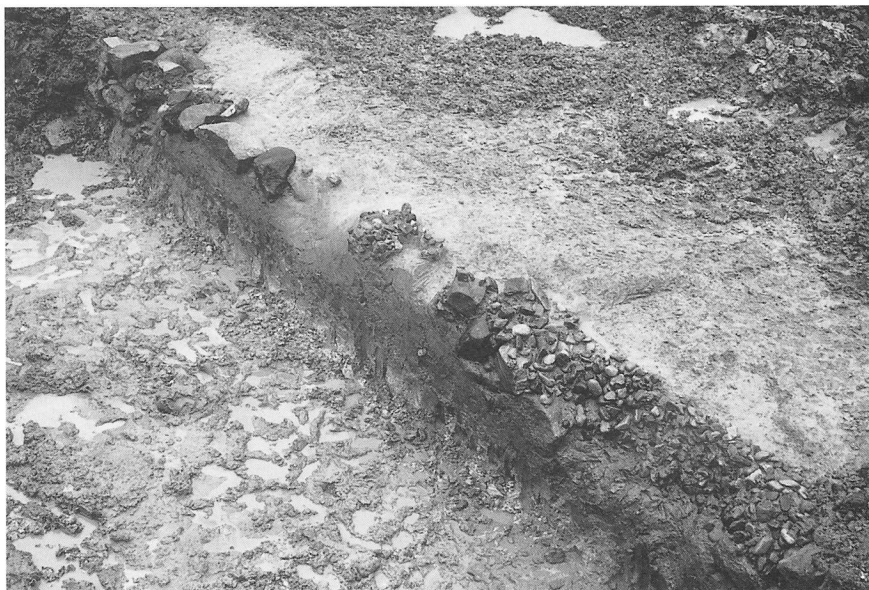


3. 内堀北 I 区の下層石垣断面





1. 内堀北Ⅱ区の下層石垣

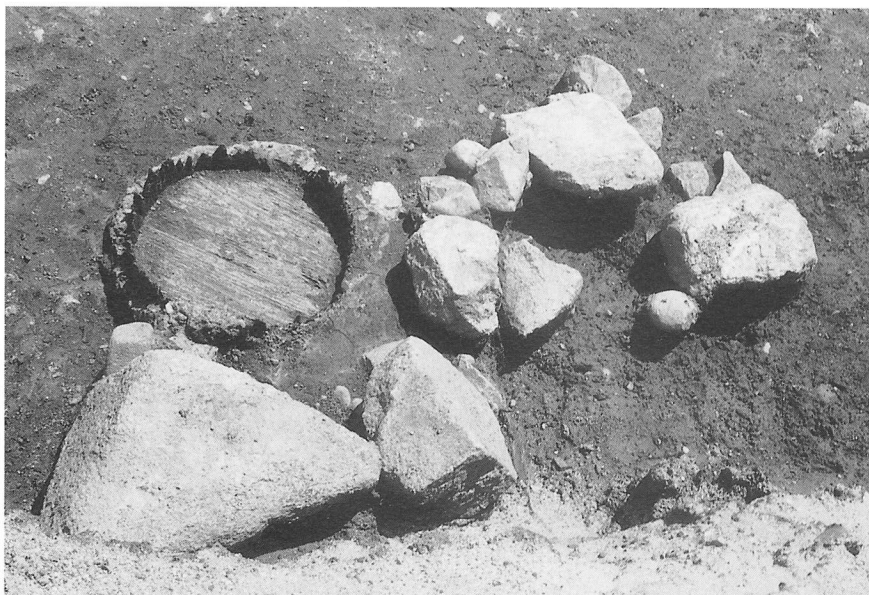


2. 内堀北Ⅲ区の下層石垣



3. 内堀北Ⅲ区北端の堀内堆積土

1. 三之曲輪内V層上面
(上層)の配石と据え
桶 (S X 55)



2. 三之曲輪内V層上面
(上層)の暗渠(暗溝
2)



3. 三之曲輪内V層上面
(上層)の石組溝
(S D 40)





1. 三之曲輪内V層上面
(上層)の土壌群北部



2. 三之曲輪内V層上面
(上層)の板柵土壌
(S K 74)



3. 三之曲輪内V層上面
(上層)の土壌群南部

1. 三之曲輪内Ⅶ層上面
(下層)のゴミ穴埋土
(S K 72)



2. 三之曲輪内Ⅶ層上面
(下層)のゴミ穴出土
の編み籠?



3. 三之曲輪内Ⅶ層上面
(下層)のゴミ穴(S
K 68)掘り上り状況





1. 三之曲輪内Ⅵ層上面
(中層)の据え甕土壇
(S K 34)



2. 三之曲輪内Ⅷ層上面
(最下層上)井戸1の
底部



3. 三之曲輪内Ⅸ層上面
(最下層下)の円礫敷
(S K 1)

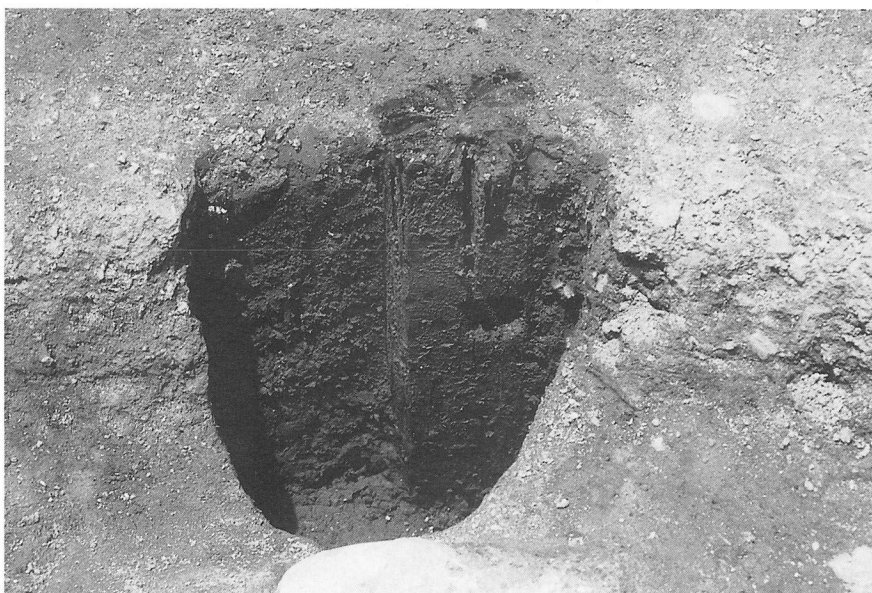
1. 三之曲輪内区層上面
(最下層下)の円礫敷
細部 (SK 1)



2. 三之曲輪内区層上面
(最下層下)の円礫敷
(SK 1)全景



3. 三之曲輪内Ⅷ層上面
(最下層上)の残存柱
と柱穴 (SP84)





1. 三之曲輪内Ⅷ層上面
(最下層上)の掘立柱
建物(S B 1)



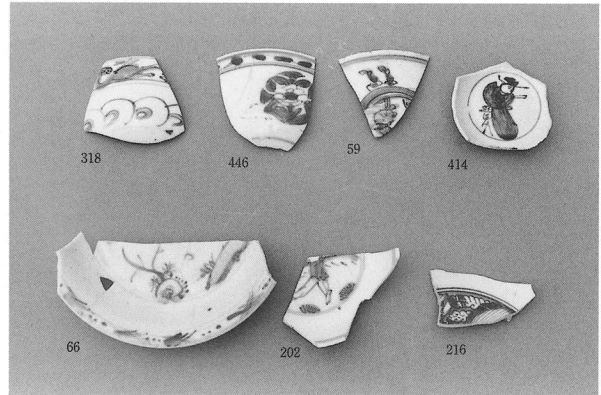
2. 三之曲輪内Ⅸ層上面
(最下層下)の掘立柱
建物(S B 2)



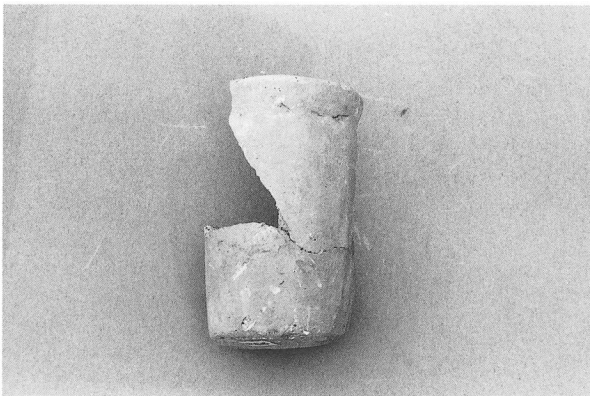
3. 調査区南端付近の縄
文海進期の海蝕棚
(カキ貝殻片堆積)



土師器埴 (6)



中国景德镇窯・青花



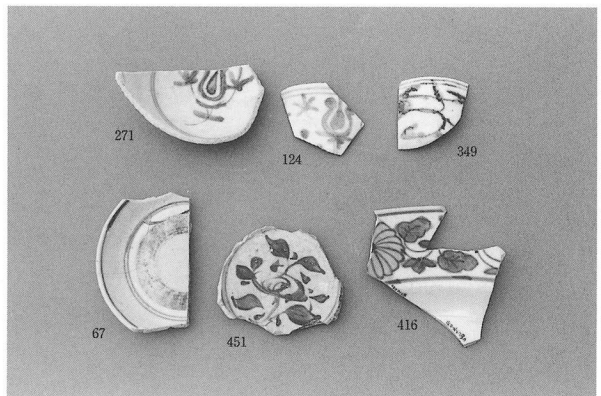
焼塩壺 (932)



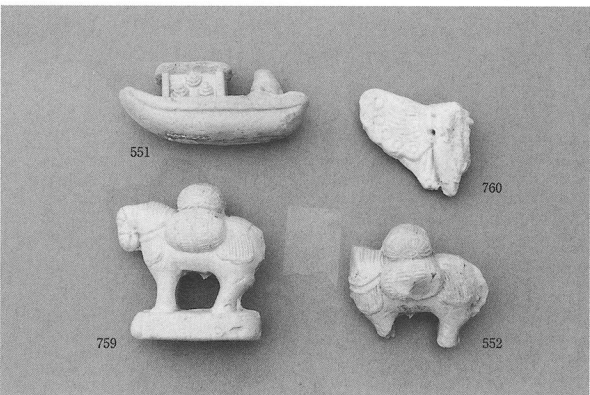
中国漳州窯・青花 (933)



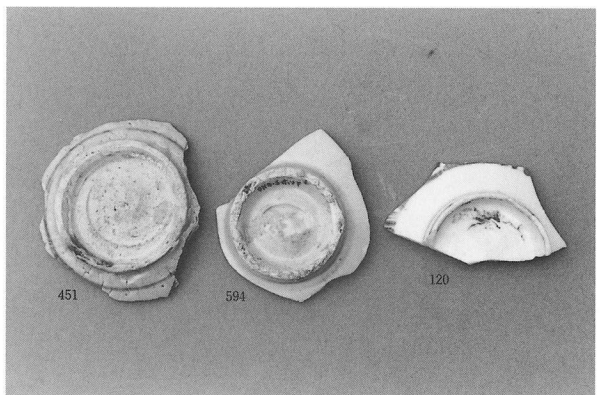
犬形土製品 (428)



中国漳州窯・青花



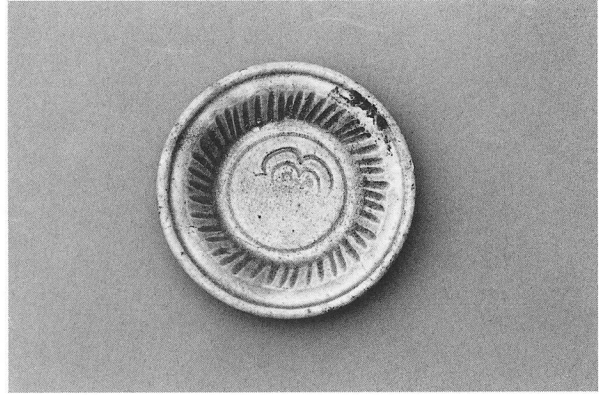
型造りの玩具



中国青花の底部



朝鮮王朝・白磁 (126)



美濃・灰釉ソギ菊皿 (207)



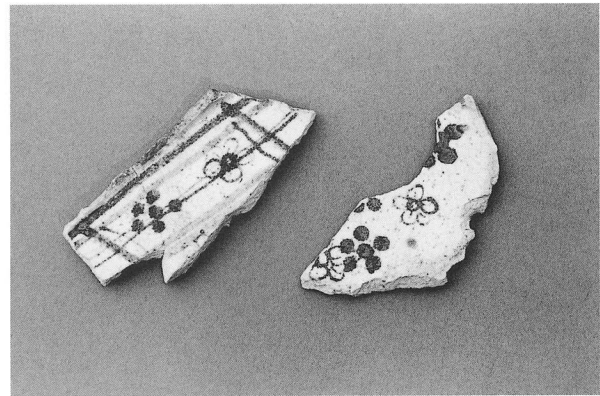
朝鮮王朝・陶器 (128)



美濃・灰釉折縁皿 (482)



美濃・天目碗 (477)



志野・向付 (左483・右484)



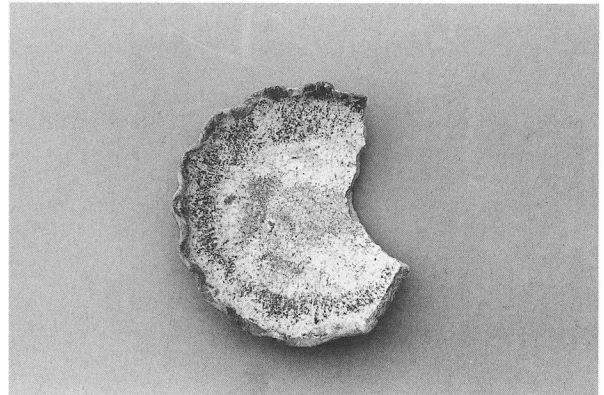
美濃・灰釉丸碗 (252)



瀬戸美濃・馬の目皿 (796)



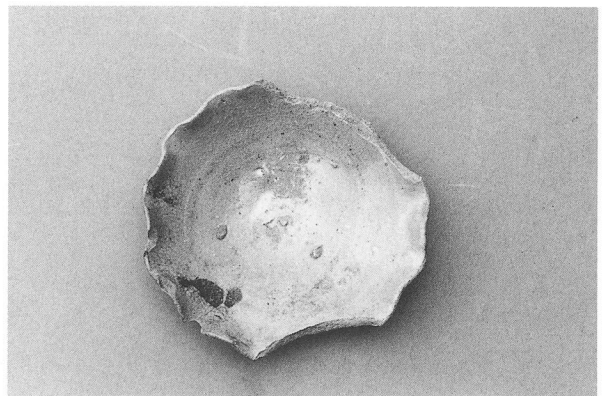
瀬戸美濃・火鉢 (798)



唐津岸岳系・藁灰釉輪花皿 (604)



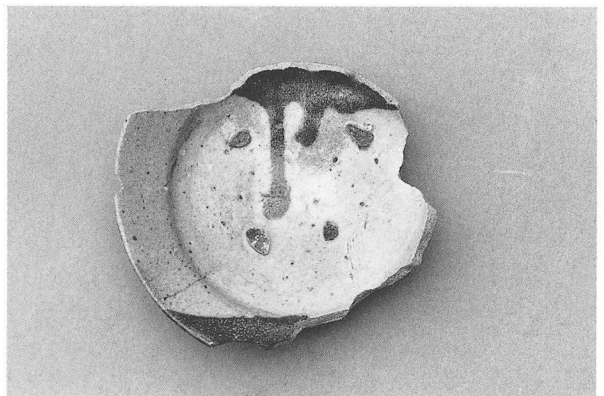
唐津・灰釉碗 (455)



唐津・灰釉輪花皿 (141)



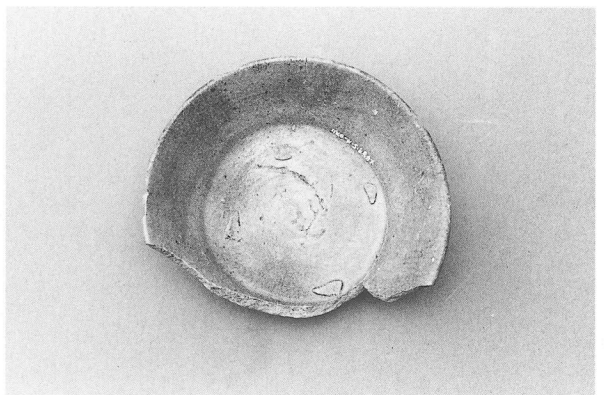
唐津・灰釉碗 (129)



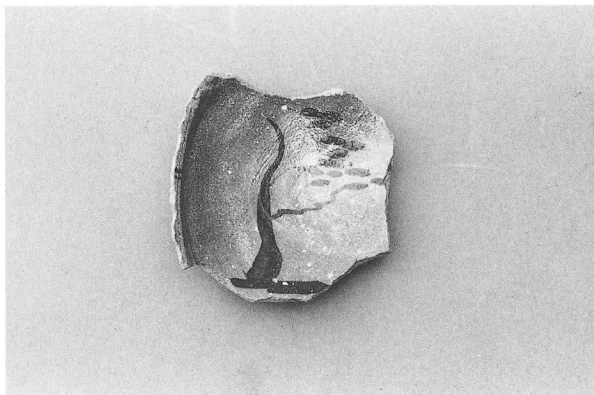
唐津・灰釉鉄釉掛分け皿 (608)



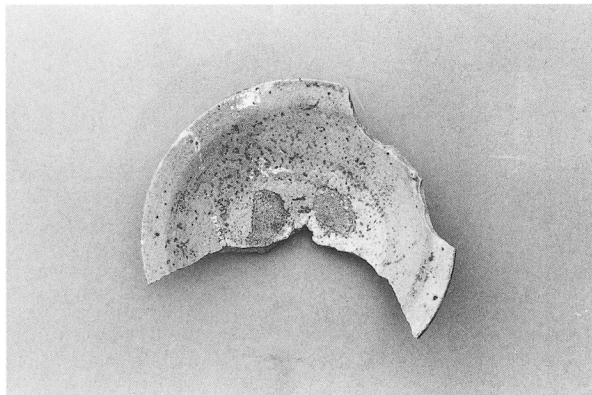
唐津・灰釉碗 (242)



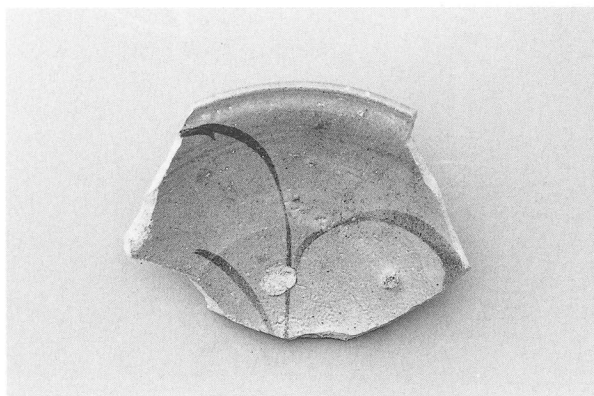
唐津・灰釉皿 (404)



唐津・灰釉鉄絵四方皿 (470)



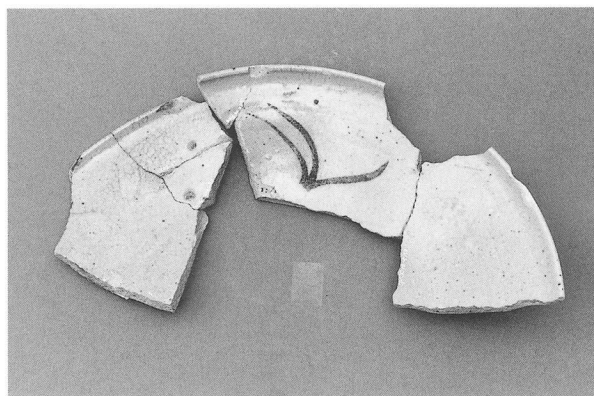
唐津・灰釉皿 (274)



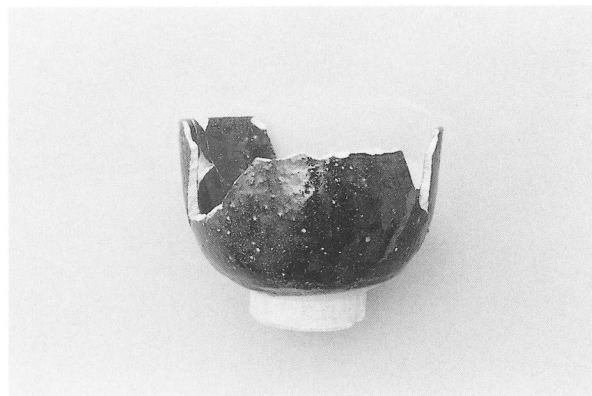
唐津・灰釉鉄絵大皿 (323)



唐津・灰釉皿 (275)



唐津・灰釉鉄絵大皿 (249)



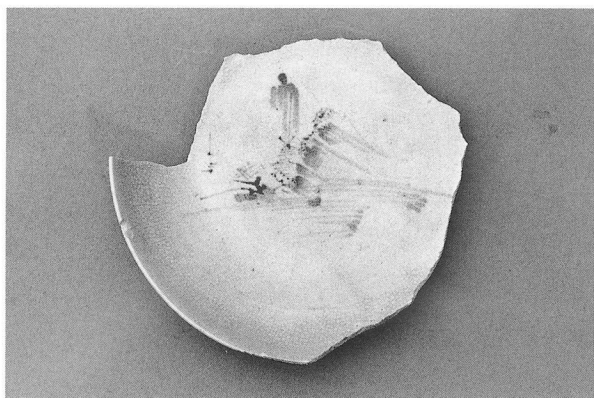
唐津・鉄釉碗 (387)



唐津・鉄絵碗 (217)



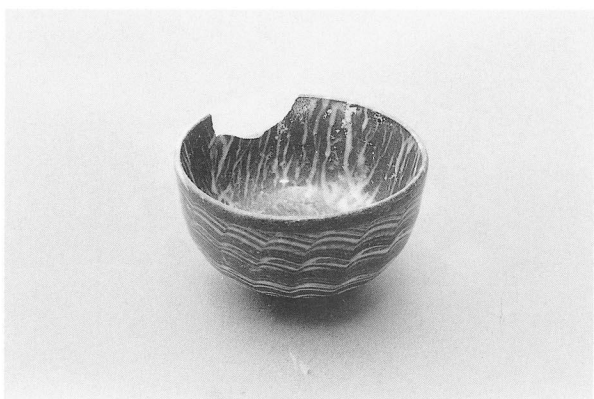
肥前内野山系・碗 (620)



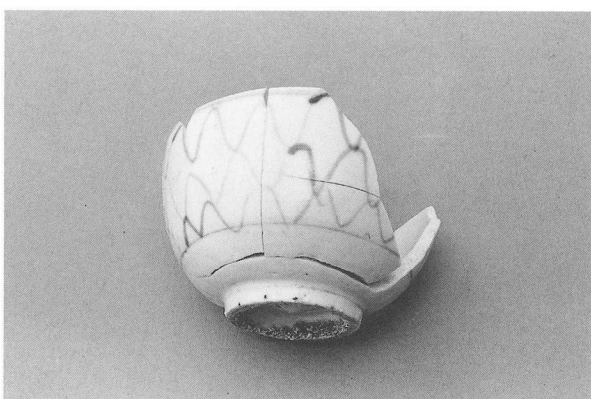
肥前・京焼風陶器 (623)



肥前磁器・染付碗 (490)



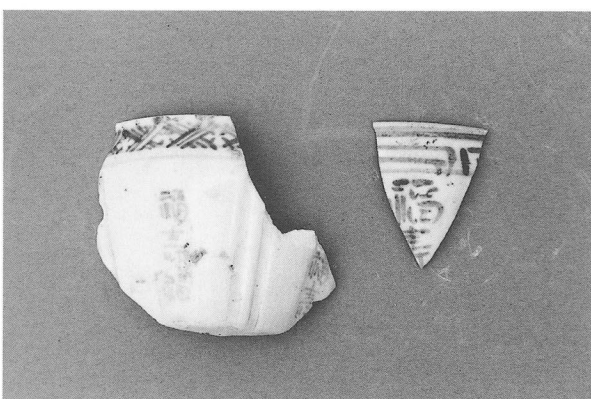
肥前・刷毛目碗 (625)



肥前磁器・染付碗 (388)



肥前・刷毛目片口鉢 (627)



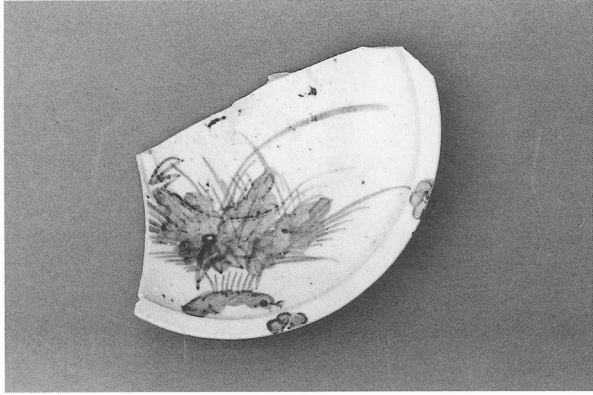
肥前磁器・染付碗 (左645・右644)



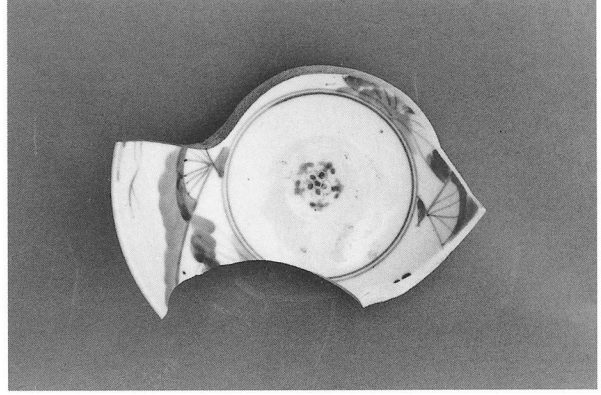
肥前磁器・染付碗 (641)



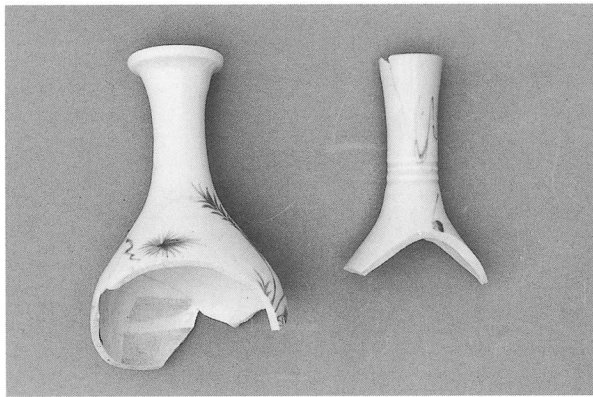
肥前磁器・染付碗 (493)



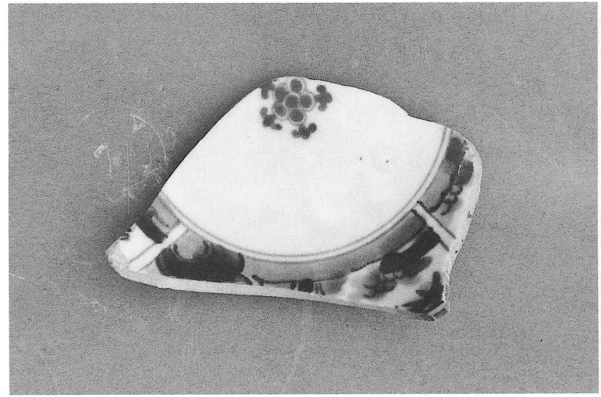
肥前磁器・染付皿 (651)



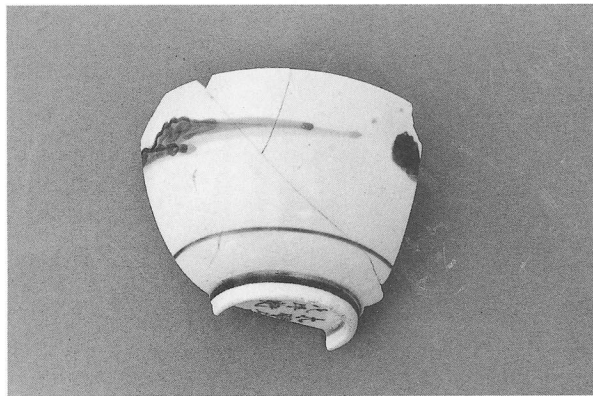
肥前磁器・染付皿 (673)



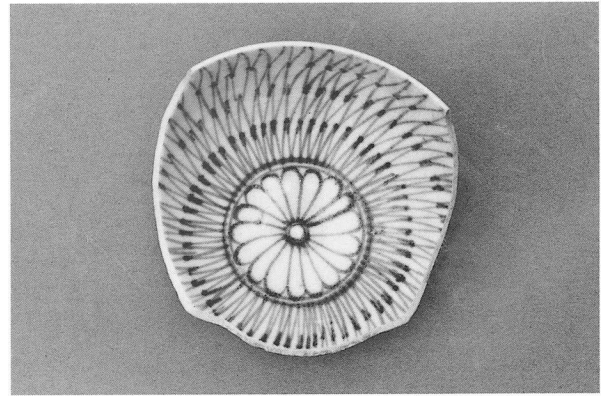
肥前磁器・染付瓶 (左656・右494)



肥前磁器・染付皿 (682)



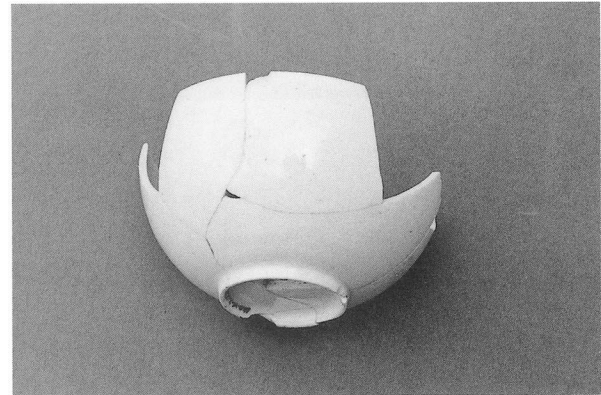
肥前磁器・染付碗 (389)



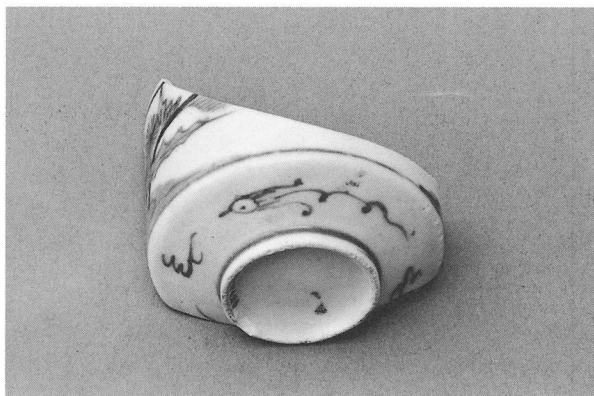
肥前磁器・染付碗 (778)



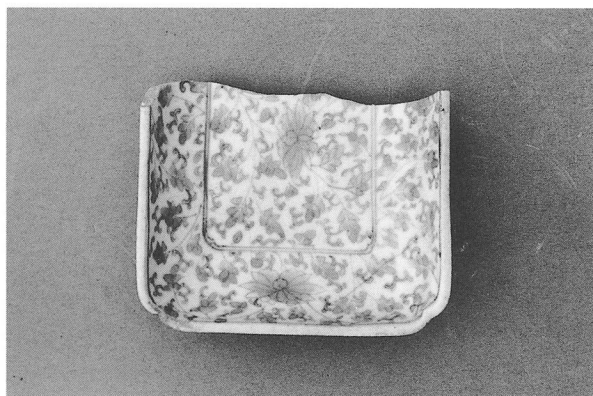
肥前磁器・染付碗 (658)



肥前磁器・白磁碗 (496)



肥前磁器・染付碗 (674)



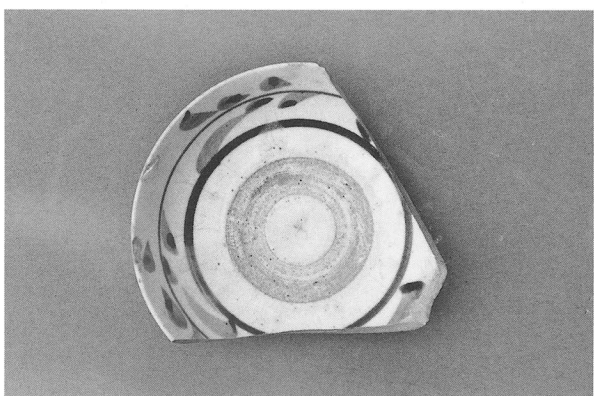
肥前磁器・染付四方皿 (695)



肥前磁器・染付皿 (690)



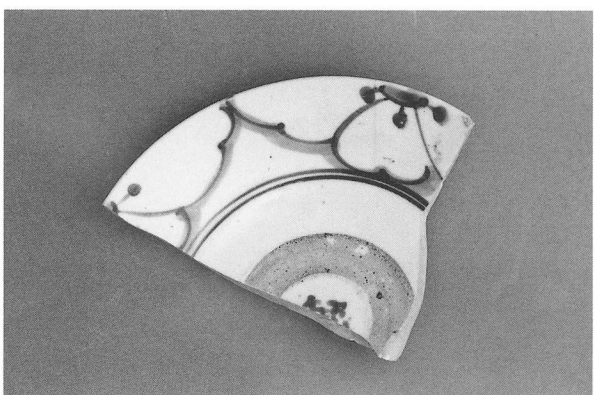
肥前磁器・染付皿 (685)



肥前磁器・染付皿 (689)



肥前磁器・染付鉢 (669)



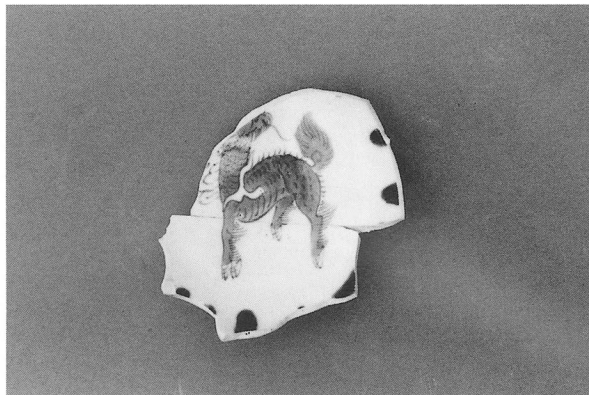
肥前磁器・染付皿 (688)



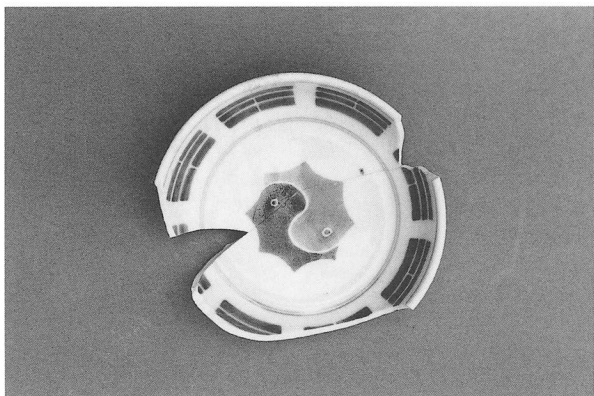
肥前磁器・染付碗 (781)



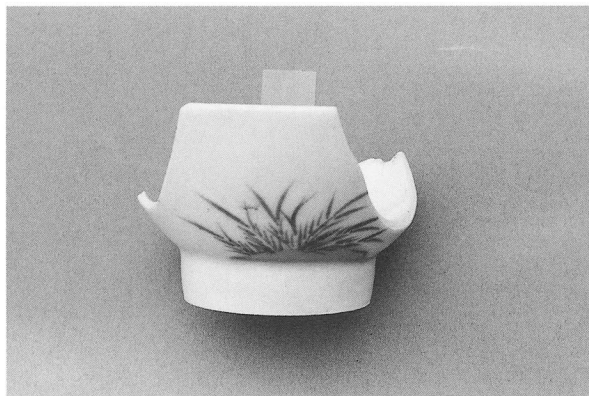
肥前磁器・染付皿 (681・686)



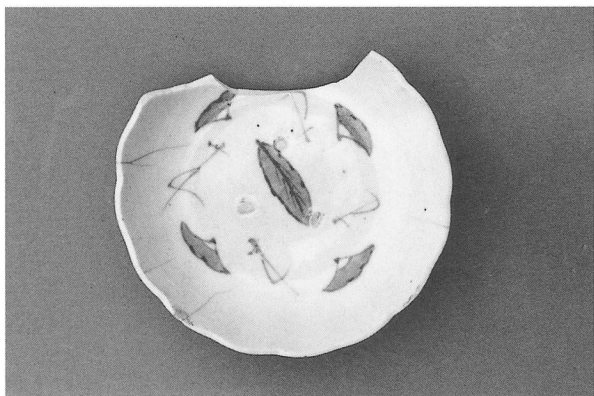
肥前磁器・染付皿 (506)



肥前磁器・染付皿 (780)



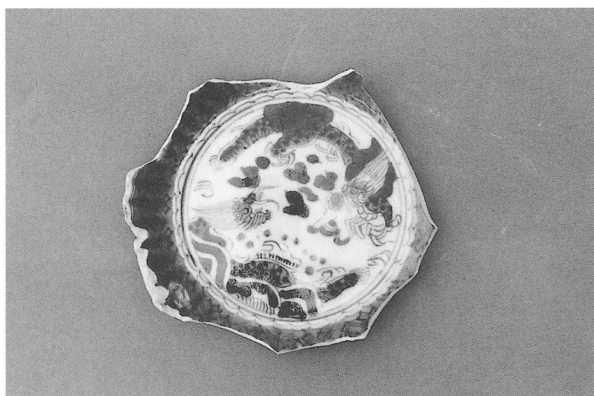
肥前磁器・染付碗 (700)



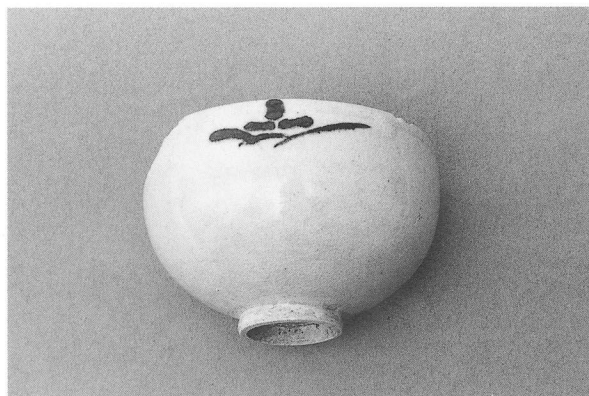
肥前磁器・染付皿 (687)



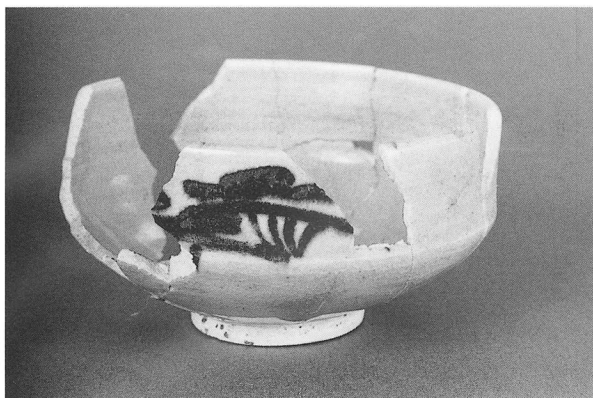
肥前磁器・染付碗 (701)



肥前磁器・染付皿 (694)



京焼系・灰釉鉄絵碗 (633)



京焼系・灰釉鉄絵碗 (785)



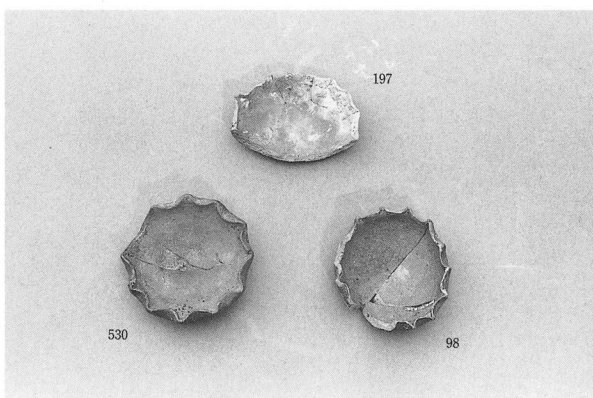
備前・三足鉢 (531)



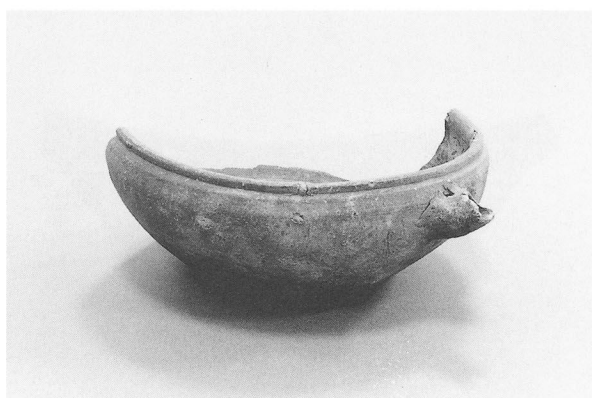
京焼系・灰釉イッチン描き蓋付鉢 (791・792)



備前・建水形鉢 (724)



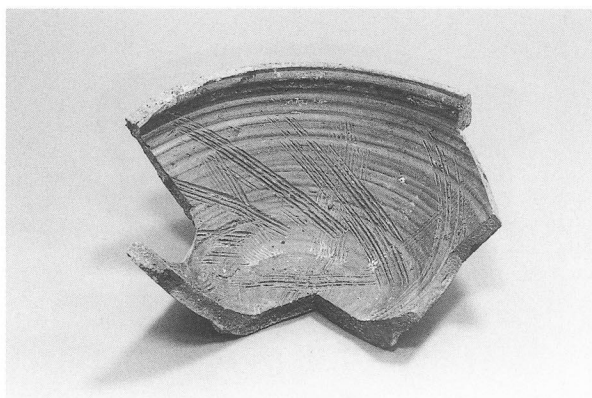
各種花小皿 (197土師質、530・98備前)



備前・水注 (725)



備前・大皿 (196)



備前・播鉢 (712)